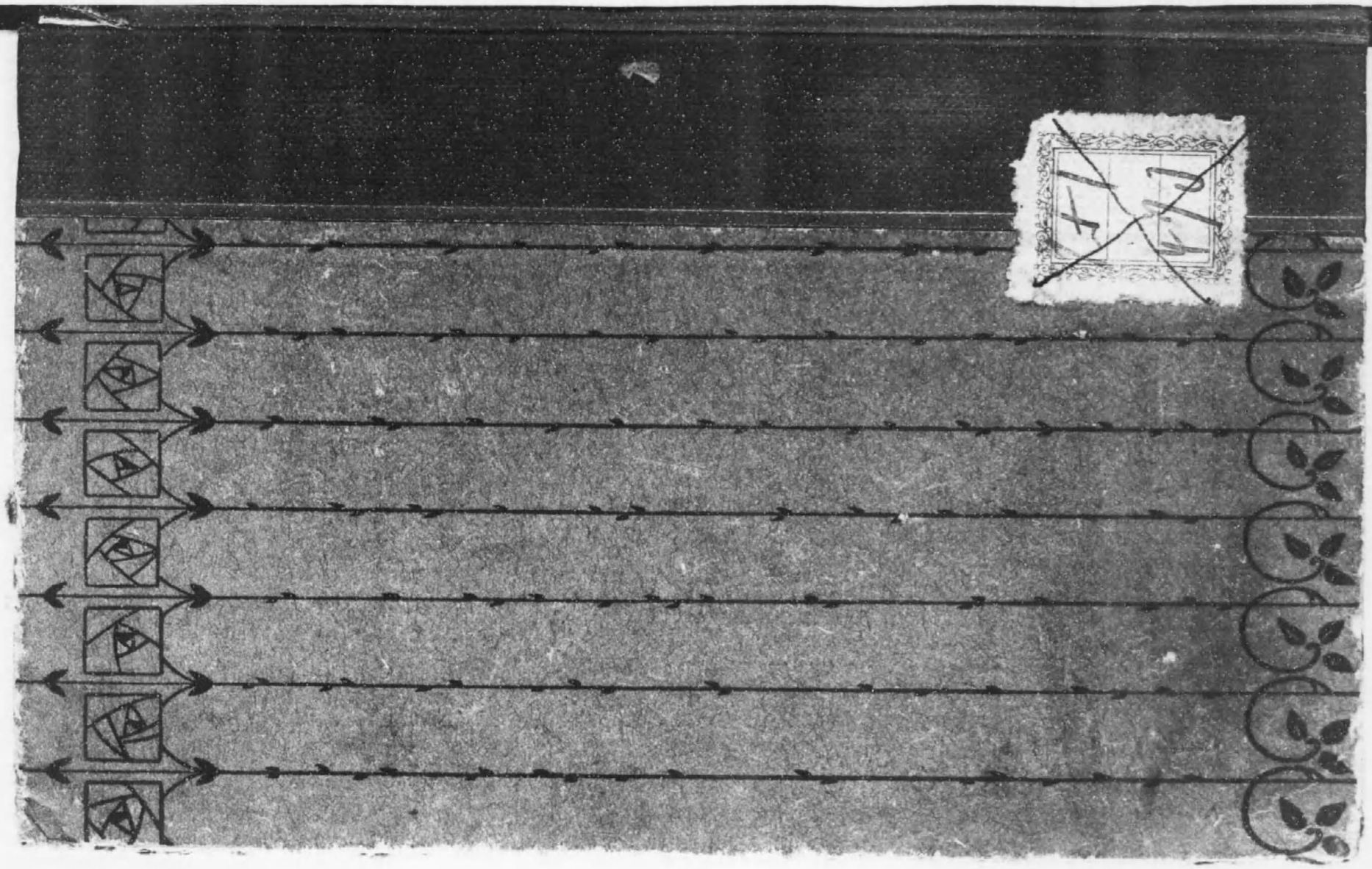
賀



特109
621

逸話の海

高山春峰 著

文誠社發行

大正
9. 6. 29
内交

序

古歌にいはずや、「人多き人の中にも人ぞなき人となれ人人と爲せ人。」と。げに、少きが如くにして多きものは借金にして、多きが如くにして少きものは人なりけり。

されば、人は、何を措きても、先づ、人とならざるべからず。これ、精神修養の必要なる所以なり。精神修養にその道あり。一に、讀むことなり。二に思ふことなり。三に、行ふことなり。三者、一を缺

いて、功、完きを得べからず。

讀むは、修養書を讀むなり。修養書、何ぞ一なちん。無味乾燥、蠟を嚙むに似たる談理を掲げ、五倫五常を提げて、これが實行を讀者に强要するが如きは、修養書の上乘なるものに非ず。寧ろ興趣の津々たる逸話、比喩譚を紹介し、讀書を不知不識の間に善導するものの優れるに如かざるなり。

本書は、實に、この趣旨に成れり。逸話一百題、比喩譚一百題、共にこれ、好個の修養資料たるべきを確信す。一は以て講話、坐談の良參考、學校、家庭

の好教材に供するに足らん。

乃はち、擧げて以て江湖に薦む。

春峰識

逸話の海

人となるには目次

『逸話篇』

素行死を決す……一
多門と鷹山侯……三
金吾に慾なし……一五
孟敏鍋を墜す……一七
佛光禪師の偈……一九
尊德翁の少時……二三
隨軒薪を惜む……二七
大西郷の高鼾……二九
新井白石の義……三三
畫家百谷の妻……三六

秀吉よく怒る……三九
坪内某の料理……四二
野坡盗と語る……四五
春臺と一諸侯……四七
彦九郎欺かる……五〇
日蓮の大自信……五五
龍馬人を知る……六〇
蜀山人の捉書……六三
一九の膨れ面……六八
福島の三不具……七三
僧寂室の秘訣……七四
信綱の大失敗……七七
直孝着替なし……八〇
石谷言を盡す……八三
重治常の心得……八三

五合庵の主人……八七
謙信必死の説……九〇
けん女の忠孝……九三
利兵衛と舊主……九六
南洲の鐵舟評……九八
名人太郎秀政……一〇一
島の浮田秀家……一〇四
豐公鶴を逸す……一〇八
豐公の無常觀……一〇九
明智光秀の娘……一一〇
乞食金を拾ふ……一一六
菰被りの名言……一二四
尊德の强意見……一二六
鮭延主從の誼……一三〇
幡隨院長兵衛……一三二

勘解由の決心……一四〇
唐犬の權兵衛……一四四
刑部感激の涙……一四八
小楠危を免る……一五〇
良覺のあだ名……一五三
お輕と内藏助……一五四
右衛門七父子……一五九
陶侃勢を習ふ……一六三
公衡望を棄つ……一六五
體空上人の悔……一六六
井上新左衛門……一六八
新左よく戲る……一七〇
泰時無慾の德……一七三
元就と儒臣某……一七七
泰時訟を聽く……一七八

梶子と百合子……一八一
池大雅の奇行……一八三
玉瀾女史の事……一九一
佛行の淡生涯……一九四
佛行と山法師……一九七
快男子可之助……一九九
成瀨の心がけ……二〇三
明慧の聞違ひ……二〇五
豊公の無造作……二〇七
本阿彌嘆服す……二一〇
文晁机上の虎……二一四
信綱恭敬の事……二一六
南洲翁の食味……二一八
四行眉を顰む……二二〇
綾小路宮の情……二二一

正則國除さる……二三一
福島丹波など……二三五
藤十郎の所望……二三五
田子方の氣焔……二三一
まつ女の至孝……二三五
黑田の殿樣藝……二三八
利常の大畧丸……二四三
政宗の長脇差……二四四
老僧木を接ぐ……二四六
北條時賴の母……二四八
家康の記念物……二五三
日向守の一言……二五四
阿部家の某士……二五七
城陸奥守の馬……二五九
彦左衞門の勇……二六三

左平次誇らず……二六七
僧盛親の行狀……二六九
法然の念佛訓……二七三
賣朝犬の進物……二七四
趙普敬讀の書……二七六
直孝の油斷訓……二七九
藤行衆に諭す……二八一
武田信玄の弟……二八四
豐州鵜を放つ……二八六
佐久間の顚倒……二九〇
律師鏡に恥づ……二九一
忠籌阿諛せず……二九三
矢田の金鯉兜……二九五
白石の義俠心……二九九
結解某の高義……三〇三

『比喩篇』

これは近道だ……一
小僧の大失敗……三
慌て者の手紙……六
飛んだ孝行者……八
形見の馬の尾……一〇
裾についた火……一三
山賊の大失敗……一五
餃えた團子賣……一八
消えたる提灯……二〇
水の底の黄金……二二
何が出來た……二五
法螺の吹損ひ……二八

利き過ぎた鹽……三〇
一足飛の成人……三三
恐しい頑固者……三五
人の眼犬の眼……三八
鬼の接む空屋……四〇
大名の新奇術……四三
無法者の禍ひ……四四
鴛鴦の鳴眞似……四七
一つ限りの卵……四九
秘蜜の約束……五三
無理なる新り……五四
怒りん坊さま……五六
天王山上の蛙……五八
此榮螺十六文……六〇
壺中の金米糖……六二

仙人の御挨拶……六六
不思議なる指……六七
望みは鬚剃り……六七
片意地くらべ……七〇
燒けたる眞綿……七三
愛の神死の神……七五
無理いふ雄鳩……七七
人眞似は駄目……七八
徇傳の荒療治……八一
食さしの林檎……八三
親蟹の大失敗……八五
一切二つ割……八六
麝猫の三變化……八八
一時か永久か……九〇
章駄天の再來……九四
……九七

駱駝の頭と瓶……九九
負嫌ひの父子……一〇一
鼻の取り換へ……一〇三
あり難いお經……一〇五
番頭の百年目……一〇七
何の垢ばかり……一〇九
涸れ盡きた牛乳……一一〇
尻尾の我儘……一一三
間抜けな泥坊……一一六
名目上の里數……一一八
子殺し豫言者……一二一
哀れな女房……一二三
周章てた王樣……一二六
已惚れ男の歎聲……一二八
一國者の主人……一三一

逃げたは俺か……一三四
皿は何處に……一三六
食はない鶏肉……一三九
乳母の坐睡り……一四一
底のない駕籠……一四三
變つた御褒美……一四六
愚かなる旅人……一四八
無一物を呉れ……一五〇
金持を羨む男……一五三
馬鹿げた門番……一五八
愚人の水飲み……一六〇
何れへ轉宅……一六一
御注文の通り……一六四
大した大福餅……一六八
仙人の眼抉り……一六〇

哀れな括り猿……一七〇
震呆けた小僧……一七二
濡れたる毛氈……一七四
狼狽た八兵衛……一七六
禿頭の最良薬……一七八
駱駝の皮剝ぎ……一八一
吝者の神頼み……一八三
世辭家の失敗……一八五
何方が馬鹿……一八七
沈香取の失敗……一九〇
歸路の遠近論……一九二
欺された盗人……一九五
耳の極樂參り……一九七
口の極樂參り……一九九
牛二百五十頭……二〇二

特109
621

逸話の海 人となるには

高山春峰著

目次

泣言の競爭會……一〇五
犀どのの落第……一〇六
誑された狐……一〇八
自慢の間違ひ……一一〇
口一杯の里芋……一一二
飲み干せぬ水……一一四
拙な胡麻化し……一一七
臆病者の渡船……一一〇
無慈悲なる親……一一二
出來ない相談……一一四
長過ぎる手綱……一一七
燒けたる父上……一二〇
周章てた從者……一二三

【目次終り】

人多き
人の中にも
人ぞなき
人となれ人
人と爲せ人

「逸話篇」

素行死を決す

＝生き死にを脱れ果てずば武夫の道も必らず誤まると知れ＝

寛文六年十月三日、山鹿素行の許へ、舊師なる大目付北條安房守から、「相尋ぬ可き御用之儀に付、早々、私宅迄參らる可く候。」といふ切紙が來た。素行は、曩に聖敎要議を著はして、漢、唐、

宋、明の學を痛擊し、程子、朱子等の宋儒に於て最も甚だしく、「道統の傳、宋に至りて、竟に泯滅す。」と迄極言し、以て古學を主張した。程朱を誹るのは、林家を誹り、延いて幕府の教育方針を誹るのである。安房守の所謂る「相尋ぬべき御用之儀」とは、その事に相違はない。素行は、忽ち覺悟を定め、「追付、參上仕る可き」旨を答へて置いて、それぞれ仕度をした。

先づ夕食を濟し、行水を使ひ、立ちながら遺書を認め、尙ほ死罪に處せられた場合、幕府へ差し出す心組で、別に一通を作つて懷中し、その他、五六個所への小翰を書いた。而も老母方へ、何等、申し送る所がなかつたのは、子の情、事を知らせるに忍びな

かつたのである。

素行は、當時、牛込早稻田に堂々たる邸を構へてゐた。程遠からぬ宗參寺には、亡父修玄庵の墓がある。次いで、それへ參詣して、今生の暇を告げ、歸ると、なるべく下人を省き、若黨二人だけを召し連れて、馬上、房洲邸へ向つた。

途中、神田の津輕邸の前迄來て、ふと思ひ出したのは、明四日同邸へ行く約束のあつたことである。素行は、使ひを寄せて、

『據ろない事故の爲めに、明日は、伺ひかねまする故……』

と告げさせた。

斯くて、房州邸へ着くと、門前、夥しく人馬が見え、どこか

へ打ち立ちさうな樣子である。一見、

『はゝあ、自分が來なかつたら、押し寄せて、踏み潰さうといふのぢやな。』

と頷きつゝ、門を入り、玄關で刀を下人に渡し、案内の士に、

『何か事がござるかな？　御門前なぞ、たゞならずお見受け申す。』

と冷笑を浴せかけ、その儘、座敷へ通つた。

待つ間程なく、安房守が出て、

『貴公は、要らざる書物を作つたものぢや。それ故、淺野内匠頭へお預けなされる。これから直ぐ、赤穗へ行かにやならぬ。宿へ

用事があつたら、何なりといふがよい。』

といふ。すると、福島傳兵衛といふが、硯を持ち出し、素行の側へ來て、

『手前、書き留め置きまして、お傳へ申します。』

と筆を執つた。

素行は、それには答へず、安房守に向つて、

『忝く存じまする。然りながら、拙者は、常に、家を出る度毎に、心殘りのないやう、萬事、處理して置きまする故、只今とても、別に申し殘すことはござりませぬ。』

毅然としていひ放つた。

稍やあつて、奉行島田藤十が來て、別室へ入つた。安房守は、これと列座した。素行は、それへ召し出され、席末に平伏した。安房守は、言葉も儼かに、

『その方事、不届きなる書物を著はせし科によつて、淺野内匠頭へお預けの旨、御老中より仰せ出された。然やう相心得よ。』

と宣告した。

聞き終つた素行は、

『御意の趣き、畏まり存じ奉りまする。』

とお請けをし、

『就きましては、右の書物の何れの點が、御公儀へ對し奉り、不

都合なのでございまするか、』

承はりたく存じ奉りまする。』

と反問した。

安房守は、藤十郎と呟き合つて、さて後ち、

『言譯もあらうかなれど、斯く仰せつけられた上は、最早、それにも及ぶまい。』

と斥けた。素行は、

『然やうの御意ならば、左右、申すべきやうもございませぬ。』

とばかり、座を起つた。

それと見た徒士目付等は、

『内匠頭殿御家來衆！　内匠頭殿御家來衆！……』

と騒がしく呼び立て、甚はだ落ちつかぬ體に見えた。素行は、笑止に堪へなかつた。淺野家の士は、素行を受け取つて、鐵砲洲の邸へ戻つた。

この間に於ける素行の作法は、一點の遺漏がなかつたとかで、淺野家の士は、その夜、感心しながら素行に語つた。

素行は、數日を淺野邸に送り、九日未明、愈よ赤穗へと出發した。時に、幕府からの注意に、

「この者には、大勢、弟子、門人がある。徒黨の輩が、道中は勿論、芝、品川なぞで、奪ひ取らうとかゝるも知れぬ。油斷のないやうに。」

とあつた。當時の素行は、弟子三千人と稱せられ、聲望の隆んなる、往々、諸侯を凌ぐの概があつたので、この注意、無理ではない。

警固の士は、爲めに、一方ならず氣を揉んだ。素行は、それが氣の毒さに、道中では、朝から午、休みから泊り迄、大小便をさへ辨じないやうにした。

斯くて、二十四日の夜、舊緣の地赤穗へ着いた。舊緣——素行は、先にも、承應元年から萬治三年迄、淺野長直の賓師として赤穗に在り、赤穗には、長直を初め、多々、舊知があつたのである。

素行は、この際の心持ちを述べて、「我等、匹夫の者に候處、一人の采幣にて大勢を從へ申候やうに、諸人、存候事は、不仕合なる中に、少しは武士の覺悟これあるにも罷成候哉。」といつてゐる。

○素行は、我が武士道の大成者である。武士道の要は、死を以て義を守るに在るのであるから、平生、一死の覺悟がなくてはならぬ。一死の覺悟があつて、能く義を守ることが出來る。素行が北條安房守に答へた一言は、武士の眞骨頭を示すものではないか。

多門と鷹山侯

＝自ら角一つあれ人心
　餘り圓きは轉び易きに＝

米澤城主上杉治憲は、鷹山と號し、善く封内を治め、又た、學を好んで、世に明君として知られた人である。或る時、賓師細井平洲に向つて、

『今日、予の逢つてよい人物は誰れであらう？』

と問うた。平洲は、

『塚田多門でござりませう。』

と答へた。侯は、早速、近臣に命じて、多門を召さうとした。所が、

「お逢ひなさる程の人物ではござりませぬ」

『何うして！　何うして！　彼れは、賤せもので……』

と遮つて、事、甚はだ面倒である。

侯は、殘念でならぬ。乃で、使者を派して、面會を申し込み、人に知られないやうと、場所をどこそこの船中といふことに指定した。多門は、斷乎として拒絶した。

『諸侯が士を見られるには、それぞれ、その禮がござりまする。人目を忍ぶ船中の出逢ひなぞは、到底、命を奉じかねまする。』

といふのである。侯は、益す多門の英物であることを知り、近臣の諫止にも拘はらず、公然、禮を以て多門を召見した。

♡男兒、氣慨がなくてはならぬ。道を以て任ずる學者としては、殊に然うである。悲しいかな、今の學者は、金にさへなれば、馬の糞にでもお辭儀をする。醜の醜！　陋の陋！

金吾に慾なし

＝金々と騒ぐ中にも年が寄り
追つけ墓に入相の鐘

森金吾は、阿波の國小鳴戸の人である。少壯、既に隱遁の志が深かつたけれど、何か事情があつたと見えて、京都の官家に仕へること多年、四十近くで、漸くその志を遂げ、辭して故郷へ

歸ると、膝を容れるだけの小庵を結び、糊粧瓶一つ持たず、

『飯なぞ炊くのは面倒ぢや。』

といつて、朝夕、蕎麥の粉で飢ゑを凌いだ。稀れに德島の城下へ行くと、知る、知らぬ人、敬ひ優遇して、金吾の好きな酒を進めた。年を老つても健康な人で、七十幾つの時、大和吉野の金峯山へ登つた。

『昔から、こんな老人の登山は、例しがない。』

とかで、山坊の記錄にも留つた。一生涯、心の儘に遊び歩き、曾て身の貧乏を知らなかつたが、安永九年、八十歳で死んだ。病中の歌に、

昨日には變るとなしに身にぞ泌む、荻に音なふ秋の夕風。

○古語に、「君子は、甚だしきをせず。」とある。金吾の無慾は、所謂る甚だしいもので、恐らく中行を逸してゐやう。けれど、强慾に於て甚はだしい今の拜金主義者に比しては、その人格、その品性、遙かに高しとしなければならぬ。同じ中行を逸する位ゐなら、金吾のやうにありたい。そして、今の拜金主義者共に、金吾の爪でも煎じて服ませてやりたい。ちつとは奇麗になるだらう。

孟敏鍋を落す

＝さらさらと尻洗ひ行く流れ川を
穢く留むる人ぞ糞念＝

後漢の時、鉅鹿の孟敏は、土鍋を荷つて、地へ墜し、振り向きもしないで、行き過ぎた。通りかゝつた太原の郭泰が、

「おいおい。」

と呼び留め、

「お前、鍋を墜したぢやないか。」

「はい、落しましたよ。」

「振り向きもしないのは可怪しいね。」

「鍋は、割れたのです。それを見たとて、何にもなりません。」

との言葉に、郭泰は、大に感心して、勸めて學問をさせた。

○割れた土鍋は、見直したとて、仕方がない。なくなつた金は、惜しんだ所

で、返りはせぬ。失敗した事は、悔んでも、無駄である。「死んだ子の年數へ。」は、すべて執着の爲で、未練に近く、男子の禁物とする所である。要は、仕損じのないやうに注意し、既に仕損じた上は、取り返しのつかないことと諦め去つて、新たに一歩を踏み出すに在る。

佛光禪師の偈

—身も消えて心も消えて渡る世は
剣の先も障らざりけり—

鎌倉圓覺寺の開山佛光禪師は、宋の明州慶元府の産である。夙に佛門に入り、修道多年、聲光の四に輝くに及んで、北條時宗に

聘せられ、弘安三年、我が國へ渡來した。元寇の役に、時宗は、軍裝して禪師に見え、

『大事、到來す。如何か用心せん？』

と問うた。禪師は、たゞ一言、

『驀直に進前せよ。』

と敎へた。時宗は、威を揮つて喝一喝した。禪師は、

『眞に獅子兒！　能く哮吼す。』

と賞めた。時宗は、拜謝して出ると、その儘、筑紫に向つた。

弘安九年九月三日、

諸佛凡夫同是幻。　若求實相眼中埃。

老僧舍利包天地。　莫向空山撥死灰。

（諸佛、凡夫、同に是れ幻。若し實相を求むれば、眼中の埃。老僧の舍利、天地を包む。空山に向つて死灰を撥することと莫れ。）

の偈を遺して示寂した。壽六十一。

禪師が、まだ宋に在つた時の事である。台州の眞如寺を管してゐると、德祐乙亥、元の兵が、來り侵した。禪師は、溫州の能仁寺へ避けた。間もなく、元の兵が、溫州へ入つた。衆は、先を爭つて奔竄した。禪師は、獨り禪堂に在つて、安然としてゐた。忽ち元の兵が突入して、刀を揮つて禪師の頸に擬した。禪師は、神

色、常の如く、徐ろに偈を說いた。

乾坤無三地卓二孤筇。一　喜得人空法亦空。

珍重大元三尺劍。　電光影裏斬二春風。一

（乾坤、地として孤筇を卓つるなし。喜び得たり、人空、法亦た空。珍重す、大元三尺の劍。電光影裏、春風を斬る。）

元の兵は、懺謝して他へ向つたとか。

○死生を超脫した者には、縱しこの首を刎れられるとも、「電光影裏、春風を斬る」が如くで、一向、平氣なものである。首を刎れられて初めて死ぬのではない。彼れは、夙に生きながら死んでゐるのである。生きながら死ぬに及ん

で、人は無上の强者である。

尊德翁の少時

＝一筋に思ひいる、矢の矢先には
堅しと見ゆる物なかりけり＝

二宮尊德、通稱金次郎、相模の國足柄上郡柏山村の農夫利右衞門の子である。天明七年を以て生れた。その家貧しく、日夜、父母の生業を助けて、殆んと寸暇もなく立ち働きながら、尙ほ且つ學問を勵んだ。薪を採つて、山から歸る道すがらも、歩き歩き、大學を音讀し、覺えず高聲を發して、

『あの子は、狂人ぢやないか。』

と疑はれたこともあるとか。

寛政十二年、十四歳、父を失ひ、享保二年、十六歳、母に別れて、孤兒になつた尊德は、伯父萬兵衛に引き取られ、二弟は、川窪某の養育を受けることになつた。

尊德は、伯父の家に在つて、晝は、懸命に、その農業を助け、夜は、書物を讀んで、無上の樂みとした。

所が、伯父は、吝嗇で、野鄙で、その上薄情でといふ、仕方のない人物で、

『俺は、貴樣を養ふのに、隨分、費用がかゝるので、大きに困つ

とるのぢや。夜學をして燈油を費すとは、一體、何うした了簡ぢや？　第一、百姓の子が、本を讀んで、何になる？　止めよ！止めよ！』

と叱りつけた。

尊德は、唯々として命を奉じたが、さて殘念でならぬ。乃で、暇ある毎に、荒地を耕して、油菜を作り、その種子を燈油に代へて、又々、夜學を始めた。

すると、伯父は、復た叱言である。

『夜學をする暇があつたら、何故、繩でも綯つて、俺の費用を補はぬのぢや？』

といふのである。

こゝに於て、尊德は、尋常の手段では、到底、志の遂げ難いことを知つて、晝間は勿論、夜も、繩を綯ひ、草鞋を作つて、伯父の家業を手傳ひ、家人一同の寢た後で、そつと起き出して、行燈を灯し、上から衣服を覆ひ、その影に坐つて、讀書、往々、雞晨に及んだ。

♡尊德は、斯くの如くにして、その學業を成就し、その人物を磨き上げたのである。古語に、「志ある者は、事、遂に成る。」といふ。人の學業を妨げるものは、學資のないことではない。餘暇の乏しいことではない。堅忍果決、確乎として拔くべからざる志のないことである、昭憲皇太后の御詠に、

人心斯からましかば白玉の、眞玉は火にも燒かれざりけり。

薄志弱行の徒は、日々に三たび拜誦して、己れの惰眠を醒すべきである。

隨軒薪を惜む

＝月や雪春咲く花も世の中の
寶と知りて徒に散らすな＝

河村隨軒は、江戸の大火に、材木を賣つて、巨富を致し、後ち大阪の安治川を開くなど、種々の公益事業あり、その膽その識、素より尋常の商人ではなかつた。

隨軒、或る日、廚へ行つて、竈に燃してある薪の多過ぎるのを

見ると、その一二本を拔き去り、下女が、

『旦那樣は、大家の御主人で、それに、大氣な方だと、世間で申してをります。僅か一二本の薪をお惜しみなさるのは、合點が參りません。』

と無遠慮に譏ると、

「お前は、場合を知らぬのぢや。」

と一笑し、

『俺は、富士山の頂上へ登つては、足下に見える大海の魚を、全部、漁り盡すやうなことを考へる。米や麥を作つて、それを食ふとなると、一粒でも失ふまいと思ふ。今、竈へ向つて薪を惜しむ

のも、同じ道理ぢやないか。』

といつたとか。

○惜しむべきに惜しまない。これを奢侈といふ。惜しむべからざるに惜しむ。これを吝嗇といふ。何れも、中行を逸してゐる。惜しむべきに惜しみ、惜しむべからざるに惜しむ。これを節儉といふ。これでなければならぬ。中行は、こゝに在る。

大西郷の高鼾

＝身を縛る繩はこの身の外になし
身を思ふ故に身を縛るなり＝

西郷の大至誠と勝の大果斷と兩々相待つて、江戸開城の議は、談笑の間に決定した。官軍に西郷なく、幕府に勝なく、事の成行に任せたならば、江戸は、焦土に化したも知れぬ。

明治元年四月四日は、江戸城授受の當日である。西郷は、橋本柳原の兩勅使及び參謀四名と共に入城した。勅使は、德川方の田安中納言等に、勅命を傳へられた。式、既に終つて、西郷の姿が見えない。大久保一翁は、尋ね尋ねて、一室に仰臥し、鼾聲、雷の如き西郷を發見した。搖り起して、

『勅使も、最早、退城せられた。歸らうではないか。』

といふと、西郷は、巨軀を起しながら、

『殿中の立派なのに見恍れて、釘隱しを數へてゐる中に、つひ睡くなつて……』

と答へ、象の如くに濶歩し去つた。

○既に開城と決した後ではあるが、不平の氣は、幕臣の間に横溢して、動もすれば、その勃發を見やうとし、勝の如き、これが沈壓に奔走して、その日、立ち會はなかつた位である。なかなか油斷のなつたものではない。その際、敵の巣窟ともいふべき江戸城内で一睡するなどは、膽、斗の如き者のみの事である。西郷は、那の邊からそれ程の膽を得て來たか。西郷には、慾がなかつた。遺訓に曰く、「命が要らず、名も要らず、金も官位も要らぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業を成し得られ

ぬものなり。然れども、斯くの如き人は、凡俗の眼には見るべからず。」と。西郷こそ、斯くの如き人であつた。その大膽は、蓋しこゝに由來する。これ、何人もの熟思を要する所である。

新井白石の義

＝忠孝の道を迷はぬ折々や
　教への親の恵み思ほゆ＝

新井白石は、困頓流離、食ふや食はずの間に學問をして、遂に一代の大學者、大政治家となり、六代將軍家宣に重用せられた人である。堀田家を去る時など、餘財とては、青銅三百、白米三升

に過ぎなかつたが、それでも、意氣は盛んなもので、

『何、急に餓死することもあるまい。』

と、淺草邊に家を借りて、日夜、學事に勉めたといふ。

その頃の事とか、谷某といふがあつて、

『其許は、第一、出身が宜しくない。加に、世に用ゐられぬ人に就いて學問をしてをられるので、大層、お出來ではあるが、出世が遲いかと思ふ。今の中に、師匠を代へられた方がよくはないか知ら？』

と注意した。白石は、當時、木下順菴に學んでゐた。然るに、時の將軍五代綱吉の覺えのめでたかつたのは、林大學頭で、順菴

は、餘り用ゐられなかつた。谷某の意は、順菴を去つて、林家に就け、といふに在つたのである。

白石は、たゞ默々として聞いてゐたが、再三再四、勸められると、

『私の爲めを思はれてのお言葉と承はる。けれど、その實、私の爲めには宜しくない。孔門の士は、如何でござる？　師の遇不遇を理由に、去就を決するといふことであつたら、あの人たちは、何を苦しんで、陳蔡の間に從ひ、師と艱難を共にしませう。凡そ人間には、死を以て報いるべき者が三つござる。父と師と君と。私は、最早、父を失ひ、又た、君もない。今の私が、死を致すべ

きものは、たゞ師のみでござる。』

威儀を正し、毅然として答へた。谷某は、內心、怩忸として恥づる所があつて、再び口を開かなかつたとか。

♡師道の頽廢、今の如く甚だしきはない。今の學問をする者は、我が師たる人を、學問販賣所——學校——の技手位ゐに考へてゐる。師に對して、些かの情誼がない。死を以てこれに報いるなどは、思ひも寄らぬ。輕薄、厭ふべしであろが、退いて思ふに、罪の一半は、師の側にあらう。今の學校教師は、學問の切賣を事とし、生徒の爲めを思ふこと古人の如くでない。孔子が、門人顏回の死を哭し、冉伯牛の病中、その手を執つて、「これを亡せり。命なるかな、この人にしてこの疾あること、この人にしてこの疾あること。」と悲し

んだやうではない。彼れも輕薄！　此れも輕薄！

畫家百谷の妻

＝大船の思ひ賴める君故に
盡す心は惜しけくもなし＝

畫家小田百谷、字は巨海、一に海僊と號した。長門の人である。初め、京都へ出て、吳月溪に學んだが、その畫風に慊らず、深く唐畫を喜んで、遂に長崎遊學を思ひ立つた。けれど、家に一文の貯へもなく、殊には妻を持つ身の、何とも仕方がない。

『自分一人なら、左も右もならうけれど……』

と思ひ煩ふにつけ、毎夜、夢に迄見て、

『あゝ、殘念な！』

口惜しげに、囈語にさへいつた。妻は、不思議に思つて、

『時々、妙なお囈語を承はります。何が御殘念なのですか。』

と問うた。百谷は、仔細を話した。妻は、

『それ程に思し召す事を、妾故にお仕遂げなさらぬとあつては、成程、御殘念でございまよう。妾としても、心苦しう思ひます。何卒、長崎へお出でなさいまし。妾は、何んなにでも辛抱して、良人の御成業を樂みに、お待ち申してをりますから。』

と勸めた。百谷は、雄々しい妻の言葉に力を得て、

『では、頼むよ。』

とばかり、用意もそこそこに、長崎へ行つた。

斯して、百谷は、留學數年、明人吳春に從つて、その業を卒へ、京都へ歸つた。妻の喜び、それは、いふ迄もない。やがて、手函から三十兩の金を取り出して、百谷の前に差し置いて、

『お歸りになれば、家をお興しなさるのに、相當、費用のかゝることと存じて、御不在中は、精々、賃仕事なぞを致して、これだけの金を貯へました。お心置きなくお使ひ下さいまし。』

といつた。百谷は、泣いてその志を喜んだ。

百谷が、貧困の間に業を成して、一代の巨匠となり、名を天下

に轟かすに至つたのは、大部分、妻の內助によるといふ。

♡夫の成巧は、妻の內助によることが多い。夫は妻子を養ふべきもの、とのみ心得て、たゞその足手纏ひになる以外、何等、取る所のないなべての妻は、宜しく戒心すべきであらう。

秀吉よく怒る

＝むかむかと腹の立つ時省みよ

是か非か又は短慮なるかと＝

天正十二年、織田信雄は、豐臣秀吉と隙があつて、德川家康に倚つた。家康は、これを助けて、小牧に戰ひ、見事秀吉を打ち破

つた。家康の威名が、海内に揚つて、後年、天下を掌握するに至つたのは、この役に始まるといふ。

時に、徳川家の士榊原康政は、秀吉を誹つて、「織田家に向ひて弓を曳くこと、不義悪逆の至りなり。」と書いた札を、諸方に建てた。秀吉は、切歯をして、

『康政の首を取つた者には、十萬石の地を與へるぞ。』

と迄立腹した。

後ち、和睦が成ると、秀吉は、書を家康に送つて、最初の使者には、康政を寄越されたい、と注文し、康政が來ると、早速、引見して、

『小牧では、一目、お前の憎い首を見たいとばかり思つたが、今となつては、却つてお前の志が嬉しい。直々、この事のいひたさに、お前を呼んだのぢや。小平太といふのも如何？　叙爵の事に取り計はう。』

と告げ、厚く饗應した。康政は、爾後、式部大輔とこふことになつた。

♡秀吉は、よく怒つた。よく怒つたが、その都度、忽ち和らいだ。疾風迅雷、豪雨を伴つて、程なく元の快晴に復るのは、夏日の天候であるが、秀吉の怒り方は、それであつた。怒るならば、斯く怒りたい。怒りを宿して、何時迄も彼奴が、彼奴が……と目に角を立てゝゐるのは、女々しい女の眞似である。所

謂る執着の爲である。

坪内某の料理

＝古への人の言葉を鏡にて
己が心を磨くべきなり＝

三好家の滅びた時、料理の上手と聞えた坪内某といふが、織田方へ捕はれ、放囚になつてゐた。幾年かの後ち、

『坪内は、鶴、鯉の料理は申すに及ばず、七五三の儀式なぞも、よく心得てをりまする。その上、子供二人は、既に御奉公致しをること故、お免しあつて、厨の事を司らせるやうなされませ。』

と信長に告げる者があつた。信長は、

「では、明朝の料理をさせよ。その鹽梅次第ぢや。」

と命じた。

乃で坪内が、膳を進めると、信長は、一口食つて見て、

『水臭くて食はれぬ。それ、殺してしまへ。』

と立腹した。坪内は、蒼くなつて、

『承はりましてござりまする。今一度、差し上げまして、それでもお氣に召しませなんだら、お詫びには、切腹仕りまする。何卒御猶豫を願ひまする。』

『然やうに致せ。』

との言葉に、坪内は、その翌朝、更に膳を進めた。成程旨い。信長は、大層、喜んで、扶持を與へた。

坪内は、退いていつた、

『昨日の鹽梅は、三好家の風で、今朝の鹽梅は、三番目の鹽梅です。三好家は、代々、足利將軍家の事を執り、日本國中の政をも取り扱つた家ですから、何事も、卑しくありません。今朝の風味は、野鄙な田舍風ですから、信長公のお口に合つたのでせう。』

と。それに相違はない。

○料理の田舍風は、厭ふに足らぬ。野鄙な金儲け談、成巧談を喜んで、聖賢の善言嘉語を味ひ得ない紳士の田舍漢は、甚はだ困りものである。

野坡盗と語る

=何事も持つが病ひぞ裸にて
物を落せし例なければ=

俳人野坡は、越前の國前洲の人である。初め、江戸に遊び、後ち、大阪に住んで、樗木社と號した。その句に、

時鳥顔の出られぬ格子かな。

長松が親の名で來る御慶かな。

はき掃除してから椿散りにけり。

この頃の垣の結ひ目や初時雨。

爲人、恬淡無慾、家、極めて貧乏ながら、一向、氣にもしなかつた。或る夜、盗人が入ると、

『俺には、何一つ貯へがない。たゞ、茶を一斤買つて置いた。今夜は、寒いから、柴を焚いて、ゆつくり話さう。』

盗人は、頷きながら、こゝ彼處、眺め廻し、机の上に、

我が庵の櫻も淋し煙先。

とあるのを見て、

『何の火事だ？』

と問ね、野坡が、仔細を語ると、

『ちや、この場の事も、句になるか。』

といふ。野坡は、取り敢へず、

垣潜る雀ならなく雪の痕。

と書いて見せた。盗人は、感心して立ち去つたとか。

○昔から、裸で物を落した例はない。無一物で盗人に擢つた話も聞かぬ。物を持てばこそ、金があればこそ、隣家の犬の吠えるのにも、耳を欹て、胞を冷さなければならぬ。といつて、敢へて無一物を勧めるのではない。持たざる如くに持て、輕く持て。金や物を金く視よ——斯ういふのである。

春臺と一諸侯

——諂ひて富める身よりも諂はで

貧しき身こそ心安けれ＝

太宰春臺、名は純、信州飯田の人である。荻生徂徠に學び、その經術を傳へて、名を天下に轟かし、諸侯、爭つてその講義を聽いた。けれど、狷介不屈、氣に入られなければ、諸侯をも叱りつけ、直言して憚らぬ風であつたので、終生、人に仕へなかつた。

延享四年、著書數十種を殘して死んだ。

春臺が、如何に狷介不屈であつたかに執いて、一つの逸話がある。小石川に住んだ頃、或る日、通りかゝつた西國の一諸侯が、庭内の紅梅、今を盛りに咲き匂ひ、殊には、枝ぶりの面白いのを見て、駕を駐めさせ、近侍に命じて、その一枝を所望させた。取

次の者がそれを春臺に通じると、春臺は、不興顔に、

『主人秘藏の梅、なりませぬといへ。』

と命じた。取次は、唯々として退き、その旨、挨拶に及んだ。

大名は、承知しない。

『大名には大名の作法がある。一旦、所望した上は、斷られて、その儘、引つ込むわけには行かぬ。是非、申し受けたい。』

と强談判である。

春臺は、咄、この横着者め！　と思つたのであらう、山刀を執つて出て、

『大名に大名の作法があるなら、儒者には儒者の作法がある。そ

の作法は、斯くの通り。』

とばかり、自らその樹を伐り倒してしまつた。大名は、その剛膽に驚いて、言葉もなく、立ち去つたとか。

♡猾介不屈は、無論、聖人の中行ではない。けれど、世にありふれた骨抜き鮪的の人間に比すれば、優ること萬々である。

彦九郎欺かる

＝過ちを見てさへ人は解るなり
仁か不仁か、賢か不肖か＝

高山彦九郎が、曾て播摩に遊ぶと、知人等は、その方正嚴格を

厭ひ、一番、大に困らせてやらうと、一夜、強ひて室津の妓樓へ伴ひ、美妓を招き、窃にいひ含めて、彦九郎に侍らせた。妓は、莞爾として頷き、

『ようございます。きつとこの腕で……』

と嬌態縱横、頻りに媚びを献じたが、彦九郎は、たゞ酒を飲むばかりで、一顧をも與へない。恰かも蚊子の鐵牛を嚙むが如くである。妓も、殆んと持て餘した。

彦九郎は、やがて寢に就いた。更闌けて、四邊、閒寂たる頃、ふと目を覺すと、隣室に人があつて、歔欷の聲が聞える。

『はなて！』

と起つて窺ふと、先刻の妓である。影ほの暗き行燈の下で、顔を疊に押し當て、泣き入つてゐる樣子が、たゞではない。

『何を泣くか、これ、女！』

問ふこと再三に及んで、妓は、漸く顔を擡げ、涙を收めて、

『妾は、元と武士の娘でございます。只今、こんな稼業をしてをりますのも、深い事情のあることで……』

といひさして、復しても泣く。

『事情といふの？』

『先年、父は、人手になゝつて死にました。女ながらも、親の仇何とか討つて取りたいものと、こんな泥水へ身を沈めて、仇を尋

ねてをりますが、今以て、廻り遇ひません。縱し、廻り遇つたにしても、纖弱いこの身に、仇が討てやうかと、それを思ひますと、心細くなるのでございます。何卒、お察し下さいまし。』

と、さもさも、憂ひに堪へないものの如くに泣くのである。

諺に「泥中の蓮。」といふ。妓のいふ所に僞りがないならば、これぞ正しくそれである。熱血多感の彦九郎は、忽ち心を動かして、

『それは、氣の毒ぢや。けれど、心配するな。俺が、一臂の力を假して、本望を遂げさせてやる。然し、大事ぢや。決して人には漏らすまいぞ。』

慨然として斯ういつて、爾來、この妓に同情を寄せ、屢ば、こゝに遊んだ。

彦九郎は、その後、九州久留米の旅館で、屠腹して果てた。時勢を嘆じての事といふ。

後ち幾年、播州赤穂に女乞食があつた。その言葉に、

『妾は、以前、室津で遊女をしてをりました。或る時、不思議な男を欺して、隨分、金を費はせましたが、その後ち、その男は、高山といふ人で、お國の爲めに、諸處遊歷の途中、久留米で切腹されたと聞いて、驚きました。そんな偉い人を欺したかと思ふと、妾は、後悔でなりません、罰が中りはしないかと、心配の餘り、

髪を剃つて、佛の道へ入りました。』

とあつたとか。

○その道を以てする者には、君子と雖も欺かれる。たゞ何事の爲めに欺かれるかは、人物の大小、高下による。放蕩息子は、色の爲めに欺かれる。世の小人は、利慾の爲めに欺かれる。稍や品のよい所で、名譽の爲めに欺かれる。高山彦九郎は、親の仇を狙ふといふ一言の爲めに欺かれた。人間、欺かれることを免れないならば、宜しく立派な事の爲めに欺かれるやうにしたい。孔子曰く、「人の過つや、その黨ひに於てす。過ちを視て、こゝに仁を知る。」眞に然り！

日蓮の大自信

＝省みて内に疚しきことなくば
幾千萬の敵が物かは＝

日蓮に對する他宗の憎怨、幕府の嫌忌は、その極に達した。文永八年九月十二日、平賴綱を主將とする三百餘人の兵は、どつと松葉ケ谷草庵へと押し寄せた。

『如何に日蓮、上を恐れざる汝の言動、最早、容赦はならぬ。我れ、今、汝を成敗してくれる。上命であるぞ。疾く疾く出でて、尋常に縄にかゝれ。』

馬上に呼はる賴綱の大音聲には、草庵の柱も搖がんとした。折柄、法弟、檀越を相手に法華經の玄理を說きつゝあつた日蓮

は、そのたゞ事ならぬを知つて、釋迦像、法華經の二品を懷中し、椽先へ立つて出た。悠然たる姿かな！

賴綱は、憎さげに一瞥して、

『者共、あれ召し捕れッー！』

と下知した。兵等は、日蓮を引き摺り下した。

日蓮は、きつと賴綱を見上げて、無道の成敗を責めた。

『ほざくな！』

賴綱の言下に、兵等は、日蓮の懷ろから法華經を引き出し、取つて日蓮を打つた。法華經は、風なきに散つて、落花狼籍の體！

手取り、足取り、日蓮を馬上に舁き載せた。當時の刑場龍の口へ

引つ立てゝ、首を刎ねやうとしたのである。

斯くて、日蓮は、途中、棧敷臺下では、棧敷の尼から胡麻餅を供養され、やがて、鶴ケ岡八幡の祠前へ來ると、瞥然として馬を下り、人々の驚く中に突つ立つて、神殿を仰ぎつゝ、

『八幡大菩薩に物申す。如何に？　大菩薩は、眞の神に在すか、如何に？　釋尊が靈山にての御說法には、十方の佛、菩薩、無量の諸王、三國の善神を擧つて、法華經の行者を保護すべき旨、固く誓はせられてある。今この日蓮こそは、日本第一の法華經の行者ではござらぬか。身に一分の罪なくして、首を刎れられに行くものを、大菩薩は、何とか爲はす？　眞の神に在すなら、何とて

こゝへはお出逢ひなさらぬ？　日蓮、若し首を刎ねられなば、この由、釋尊へ訴へにやならぬ。それを恐ろしとならば、疾く奇特の現證を顯はし給へ。』

いひ終つて、再び馬に上つた。聞く者は、

『てもさても、大膽な者ではある！』

と、舌を卷いて驚いた。

夜に入つて。龍の口へ着いた。日蓮は、首の座に直つた。疾風雨を捲いて到つた。怪しの光が、唸りを生じて飛んだ。劍手依智三郎の揮り冠つた名劍蛇胴丸は、ぽきと音して、三段に折れた。幕府は、日蓮の死を赦して、改めて、佐渡へ流すことにした。

○古來、奮鬪家は多い、日蓮の如くに奮鬪した者はない。日蓮は、那の邊からその異常なる奮鬪力を得て來たか。畢竟、自ら信ずる所が厚かつたのである。己れ、法華經の行者である、との大自信が、日蓮をして能く彼れの如くに奮鬪せしめたのである。而も、自信は、自ら省みて、一點、疚しい所のないことから生ずる。古語に曰く、「己れに反てさうして縮くんば、千萬人と雖も吾れ往かん。」又た曰く、「内に省みて疚しからずんば、それ、何をか憂へ何をか懼れん。」以て知るべしである。

龍馬人を知る

＝人を人れたゞ人を知れ然りながら

人に知られんことを願ふな＝

海南の豪傑、或ひは西郷南洲よりも大きかつたとの評さへある坂本龍馬が、勝海舟の識見に服して、これが門人となり、海軍術を學んだ始め、郷里の姉へ寄せた書中に、「今にては、日本第一の人物勝麟太郎といふ人に弟子入り致し……」の一節があつた。

龍馬、或る時、海舟の指圖によつて、南洲を訪れた。所が、復命しない。二日經つても、三日經つても、たゞ默つてばかりゐるので、海舟は、堪りかねて、

『西郷は、何んな人物だつたかい？』

と問うた。龍馬は、

『あれは、馬鹿でござる。たゞ、馬鹿の幅が判りません。大きく叩けば、大きく鳴る。小さく叩けば、小さく鳴る。殘念なるかな、鐘つく撞木に手應へが薄うござつた。』

と答へた。海舟、評して曰く、「評したる人も評したる人、評せられたる人も評せられる人。」と。

○人は、人を知らなければならぬ。龍馬の南洲評の如き、眞によく人を知るものである。南洲は、無我の人であつた。才智を閃めかして、自ら得意がつたり、自說を固執して、人に迫つたりしなかつた。問はれゝば答へるが、問はれなければ、たゞ默々としてゐる。自然、問ひの大小によつて答へが違ふ。たゞ相手次第、問ひ次第といふ風であつた。龍馬は、そこを洞見したのである。龍

馬、人を知れり！

蜀山人の掟書

＝大佛は外儼めしく見ゆれども
叩いた音が中はからから＝

太田南畝、名は覃、字は子耘、通稱直次郎、後ち、七郎左衞門と改めた。雅號の幾つもあつた中に、最も蜀山人又は寢呆け先生で知られてゐる。世々、徒士の職を奉じ、微祿ながら、當時の大儒内山椿山、澤田東江などに就いて、和漢の學を修め、學問所の試驗には、甲科を及第し、支配勘定役として登用せられた。

而もその本領は、狂歌師たるに在つて、當意即妙、滑稽洒脫、容易に人の追蹤を許さなかつた。或る日、山谷の八百善に遊び、小萬といふ藝妓を聘んだ。この妓、縹致もよし、藝もありといふ尤物であつたが、何うしたわけか、一向、流行らない。蜀山人、それを聞くと、

『よし、俺が、流行るやうにしてやらう。』

と、筆を揮つて、三味線の胴に、

詩は詩佛書は米庵に狂歌俺、藝妓小萬に料理八百善。

と書きつけた。すると、この事が評判になつて、前のお茶曳き藝妓、忽ち流行つ妓になつたといふ。自ら任ずる所も、人の見る

目も、蜀山人は、當時、數ある狂歌師中の第一人者であつたのである。

從つて、蜀山人の名は、全國に響き渡り、書を乞ふ者、日々に相踵ぎ、遂には、その煩はしに堪へられなくなつた所で、壁上に掲げ出したのは、「年來、我が書を請ふ者多し。扇子、團扇、扁額、屏風、服紗、唐紙、和唐紙、可厭な羽織の胴裏に至る迄、累々として果しなければ、我れ、その煩さきによりて、上、中、下の品を定む。上は、速かに書くべく、中は預り置くべし。下に至りては、書くべからず。若し肯かずして預け置く者あらば、扇は、鼠の食むに委せ、紙は、反古堆中に沈めて、永劫、浮ぶ瀬なかるべ

し。」といふ前書の下に、

上の部

一、詩歌の心をも辨へたる人。

一、詩歌の心は知らねども、甚はだこれを信じて、貯へ置く人。

一、名人の畫讃。

一、表裝、至つて美にて、掛物にする人。

一、至つて美人の直頼み。中位ゐにては、不承知なり。又た頼みにては、受け取らず。

中の部

一、詩歌の好みなく、何にても宜しきといふ人。

一、人にやるにてもなく、自ら收め置くといふ人。

一、扇一二本、短冊二三枚、唐紙一二枚好む人。

下の部

一、惡畫、惡紙、和唐紙を辨へざる人。

一、遠國へ近々旅立つ人に贈るといふ人。

一、小肴の價高ければ、扇に書かせてやるが德用といふ人。

一、何か一向解らねども、書かせて置くが得と心得て、無性に書かせる人。この類ひ、婦人に多し。

一、筋違御門外の古道具屋、山下邊りへ賣る人。

終りに、『この外、可厭な事だらけにて、見るも煩さきが多し。あたら光陰を費して、慾深き者の眼を悦ばしむるに忍びず。仍而壁書如件。』と筆を留めた。

♡昨今、成金共の間には、書畫、骨董が大流行である。今日、蜀山人がゐたら、めつたやたらに、繪絹や絖や畫箋紙を持ち込むであらうが、蜀山人の掟に合つて、一筆を乞ひ受ける資格のある者が、彼等の中に幾人あらう？　金があるといふこと以外、趣味も、素養も、鑑識も、何もない、彼等の書畫いじりは、甚はだ以て、僭越の沙汰である。見かけ倒しの大俗物！

一九の膨れ面

＝堪忍の袋を常に頸にかけ
破れたら縫へ破れたら縫へ＝

膝栗毛で名高い十返舍一九が、初めて蜀山人を訪ねて往くと、蜀山人は、座敷へ通させた限り、何時迄待つても、出て來ない。一九は、じりじりして來た。腹立たしくもある。一九、元來、駿府の產で、父の職を襲いで、一小吏を勤めたが、素より役人たるべき人物ではなし、加に、聊か酒癖の惡い嫌ひがあつて、醉へば誰れ彼れの見境ひなく罵り散らす風だつたので、職を弟に讓つて置いて、單身、大阪へ飛び出し、淨瑠璃作者の群へ入り、こゝでも面白くなくて、更に江戸へ出たのである。今、蜀山人を訪ね

ると、何うやら待ち呆けを喰はされさうである。膨れるのに不思議はない。

『馬鹿にしてる。』

灰吹き叩く煙管の音も、邪慳である。待ち待つこと、半時餘りに及んでは、最早、我慢もし切れなくなり、例の癇癪玉を破裂させて、

『おや、お歸りですか。』

と驚く女中に耳も假さず、その儘、どんどん歸つてしまつた。

すると、どこか參會の席で、一九は、蜀山人と一緒になつた。床を背ろに坐つてゐるのは、蜀山人である。追々、酒の廻つた一

九は、つかつかとその前へ出て、

『先生、お初にお目にかゝります。手前、一九です。』

『ほう、十返舍先生か。これはこれは……』

『先生、折角、訪ねて往つた者に、待ち呆けを喰はせて、逢はないなぞは、ひどいでせう。何うしたわけですか。』

憤々として迫る。けれど、老成洒脫の蜀山人は、笑ひながら、

『否、ひどいのは、貴公だぜ。』

『何故です？』

『何時も文なしの自分、折角、貴公が來てくれたのに、何ともし方がない。庭に一本桐の樹のあるを幸ひ、それを賣つて、大に待

遇なさうといふ寸法で、下駄屋へ往き、金を受け取つて歸ると、何の事だ、貴公がゐない。お蔭で、氣を揉んだ上に、桐の樹一本、ふいにしちやつた。左右、若い者は、氣が早くてねえ。』

いひ終つて、盃を献した。流石の一九も、

『あゝ、然うでしたか。』

とばかり、恐れ入つてしまひ、爾來は、蜀山人を先生々々と崇め奉り、これに推服したとか。

♡一九は、大にしくじつた。叨りに怒れば、必らず失敗がある、悔いがある。戒しめなければならぬ。庭前の桐の木を賣つて、初對面の友を饗應しやうとした蜀山人の淵達不拘に至つては、常人の及ぶ所ではない。見上げたものである。

福島の三幅對

||美しき菌の色に油斷すな
命を奪ふ毒茸もあり||

福島正則の臣福島丹波、尾關石見、長尾隼人の三人は、何れも胸に韜略を藏し、武勳赫々の士であつた。關ヶ原の亂後、德川家康は、勳功の士に、それぞれ、賞賜する所があつた。順を追つて三人が出ると、家康の近臣中、目で知らせ、袖を曳いて、笑ふ者があつた。丹波は跛、石見は眇、隼人は聾、といふ揃ひも揃つた不具者ばかりで、世に、福島の三不具と稱した。近臣等は、それ

を笑つたのである。すると、家康は、叱りつけて、

『三人は、武功拔群の者共ぢや。その方たちは、何故、三人の武勇に感じて、自ら勵ますことをせぬ？　不心得ぢやぞ。』

この言葉に、近臣等は、大に赤面したとのこと。

♡主人の特む第一のものが、よい家來であることは、今も、昔も、變りはない。而も、人を取るのに、容貌や、態度や、言語や、凡そ外部に見はれたものを標準とすれば、多くは中らない。人の主人たる者は、氣をつけなければならぬ。妻を擇ぶにも、夫を擇ぶにも、友を擇ぶにも、事業の共同者を擇ぶにも、この點を氣をつけなければならぬ。

僧寂室の秘訣

＝正直に家業大事に勉めなば
　祈らずとても福は來らん＝

足利氏の季に、寂室といふ僧があつた。若い頃、明へ渡つて修業し、歸ると、高德の名があり、僧侶の歸依する者も多かつた。

或る時、その徒に向つて、

『愚僧に一つの秘訣がある。緊要の事ぢやけれど、今、お前たちに授けるから、決して忘れるな。』

弟子等は、耳を澄す。

『他ではない。お前たち、毎朝、起きたらば、先づ、自分の頭を撫で、又た、袈裟を顧みて、心に念じ、口にもいふがよい、自分

は、これ、釋迦文佛の法孫ぢや。縱ひ命を殞すとも、比丘の模範を失ふまいと。これ、第一の覺悟ぢや。所謂る秘訣とは、この事ぢや。』

と諭したとか。

♡善いかな教訓！　獨り僧侶のみではない。毎朝、起きたら、役人は、先づ、自分の洋服を顧みて、心に念じ、口にもいふがよい、自分は、これ、役人である。縱ひ命を殞すとも、賄賂を取りなどして、役人の模範を失ふまいと。軍人は、先づ、その軍帽、軍服を顧みて、心に念じ、口にいふがよい、自分は、これ、軍人である。縱ひ命を殞すとも、君の爲め、國の爲めに盡して、軍人の模範を失ふまいと。學生は、先づ、机の周圍を顧みて、心に念じ、口にもい

ふがよい、自分は、これ、學生である。縱ひ命を殞すとも、親を欺して、金を取り寄せ、酒色に費ひ捨てるなど、學生の模範を失ふまいと。農夫、職工、商人、すべて斯くの如くならば、その身、その幸福は勿論、大にしては、國運隆盛の基となるならう。勉めなければならぬ。

信綱の大失敗

＝用心も程々にせよ過ぎたるは
却りて我れを縛り繩なり＝

松平伊豆守信綱は、世に智慧伊豆の目のあつた位ゐ、希代の智者であつたが、「智者の一失、愚者の一得。」とやら、島原一揆の時

には、一生の不覺を取つた。

明日は愈よ總攻擊といふ前夜、令を各軍に傳へて、

『本陣で鐘を撞いたら、それを相圖に、一同、打ち立つやう。』

と約束した。

退いて思ふに、今夜にも、敵の間者が忍び込んで、あの鐘を撞き、此方の裏を搔かうも知れぬ。それでは大變、事は、失敗に歸してしまふ。といふので、撞木を外させ、自分の手元へ取り寄せた。

これで大丈夫！　と思ふ下から、まだ氣になる。鐘は、何でも撞ける。必らずしも撞木を用ひないと、遂に鐘を下させ、御丁

寧にも、嚴しく菰を卷かせて置いた。

斯くて、一睡の夢も結び敢へぬ中、先陣の方で、俄かに人馬が騷ぎ立つた。忽ち、

『敵が、押し寄せました。』

との注進に、かつぱと跳ね起き、

『うむ、然うか。では、鐘を撞け。』

と命じたが、鐘は、大地に下してある。剩けに、菰が卷いてある。撞木も取り外してある。突嗟の間に合はない。

已むなく、ひたぶりに懸つて、漸く敵を擊ち斥けることは出來たが、信綱後日の談に、

『いやもう、取越苦勢をして、不覺を取つた。』

とあつたとか。餘程、苦しんだものと見える。

♡診に、「用心は、臆病にせよ」といふけれど、それにも程度がある。度に過ぎて用心すれば、却つて用心に縛られて、身動きが取れなくなる。何事も、程程度！

直孝着替なし

‖恐ろしき何はあれども取り別けて
屋根の洩るのと馬鹿と奢りと‖

大阪冬の陣の時、井伊直孝の出した物見二騎が、雨に濡れて歸

つて來た。直孝は、自分の着てゐる小袖二枚を脱いで、これに與へた。さて、着るものがない。安藤帶刀の許から、小袖を貰ひ受け、縞の小袖、革袴を着けて、家康、秀忠の前へ伺候した。

直孝の領地近江の彦根は、湖上、船を泛べて京都へ行くのに、甚はだ近い。自然、武士の間に京都風が入り、その上、世の太平に連れて、家中の風俗が、大分、華奢になつて來た。直孝は、ひどく心配して、

『これは、改良せにやならぬ。』

と、こゝに一計を案出した。令せずして儉約を行はせやうと、然ういふのである。

で、或る年、江戸から歸るのに、供の人數だけ、木綿衣服を用意し、彦根へ入る頃、俄かに配つて、それを着させた。

彦根の士たちは、

『殿のお歸りぢや。』

といふので、美々しく着飾つて、途中迄出迎へた。見ると、供の者は、何れも木綿衣服である。一同、これはと驚いて、自分の美服を裂きたくもあつた。直孝の豫期した通り、彦根の奢りは、忽ち止んだ。

♡奢侈は、貧窮を招き、貧窮は、貪汚を致す。その不德たる論はない。近來、生活難を云々する者は、その原因を物價の騰貴に歸するが、恐ろしいのは、

物價の騰貴よりも、各自の奢侈である。生活難は、大部分、奢侈から來る。而も、奢侈に因る最大弊事は、間接に、人をして貪汚ならしむるに在る。近來、奢侈の風が甚だしい。大に戒しめなければならぬ。

石谷言を盡す

‖飯と汁木綿着物は身を助く

その餘は我れを責むるのみなり‖

それ程迄に、奢侈を惡み、儉約を重んじた井伊直孝も、奢侈の理由によつて、大に江戸町奉行石谷貞清に凹まされたから驚く、三代將軍家光の時、直孝は、大老の職に在つた。或る日、夕飯

を食つてゐる所へ、石谷が訪ねて來た。直孝の膳には、母からの到來物、小鯛の鹽燒が載つてゐた。豫ねて石谷の性格を知つてゐた直孝は、急ぎそれを膳の下へ隱して、

『何卒、此方へ！』

と案内させた。

所が、石谷は、直孝の膳を見て、苦り切つて、

『御大老には、白米の飯をお食りでござるか。近來、士民共、大分、奢つて參つたが、御大老からがこれでは、何程、禁じても、效果のないわけでござる。さてさて、嘆かはしいことでござる。』

と、溜息を吐いた。直孝は、赤面して、飯も喉へ通らなかつた。

といふ。當時は、身分の高下を問はず、すべて、玄米に味噌汁位ゐを食つてゐたのである。

○今や如何？　その日稼ぎの日傭人足でも、一皿五六十錢の刺身を食ふ。小鯛の鹽燒が何であらう？　大老の顯職に在る人が、白米飯の爲めに、部下の苦言を聞くなど、今から思ふと、嘘のやうな話である。變れば變る世の中ではある。抑も、時勢の進歩か、退歩か。

重治常の心得

＝物持てば持つに使はれ持たぬには
持たぬにも亦た使はるゝ人＝

竹中重治は、元龜、天正の頃の勇士である。嘗て部下を諭して、『分に過ぎた價を出して、馬を買つてはならぬ。よい敵と見かけ、追ひ詰めて、馬を下り立たうとする時、馬副ひの人が續かぬと、この馬、人の物にならう。再び得られる馬ではないと、惜しむ心が出て、つひ、時刻を失ふ。馬のよいが爲めに、却つて名を失ふのぢや。十兩の馬が買ひたくば、五兩の馬で滿足する。すれば、惜しげもなく飛び下りられる。乘り捨てゝよい時には、捨ても出來やう。捨てた所で、殘りの五兩で、復た馬を買へばよい。』

と諭し、

『馬に限らず、萬事、この心得があるべきぢや。武士たる者は、

義の爲めには、身をさへ捨てる。財寶なぞは、尙更のことぢや。塵芥とも思はぬ心がけ、これ、武士の本意ではないか。』

といつたとか。

♡何人も、金銀、貨財、家、屋敷、凡そ持つ所があれば、その物に囚はれることを免れない。これ、萬人共通の弱點である。この弱點によつて、物の爲めに心を苦しめ、又た、善事を怠る。古語に、「義を見てせざるは、勇なきなり。」といふけれど、物に囚はれては、人の難儀を餘所に視て止むの外はない。宜しく重治の言に鑑みて、物に囚はれない工夫、これ、肝腎である。

五合庵の主人

＝我れといふ小さき心を捨てしより
今は世界をまるで我が物＝

越後の良寛上人は、人も知つたる名僧である。新發田侯が、或る時、禮を厚うして、請待しやうとすると、上人は、

焚く程は風が持て來る五合庵。

と口吟んで、應じなかつた。五合庵は、その居の名である。

庵中、ある物とては、たゞ一つの摺鉢ばかり！　その摺鉢で、味噌も摺れば、米も研ぐ。又た顏も洗ふ。時としては、雜巾桶にも代用して、平然としてゐた。

或る年、筍が、椽の下から頭を出したが、床板に問へて伸び

られない。上人は、

『可哀さうぢや！』

といつて、床板も外し、疊に穴を開けてやつた。筍は、によきによきと伸び出して、今度は、天井に問へる。天井を拔く。屋根に穴を開ける。五合庵は、筍の爲めに串刺しにされた。

♡悟つた人の眼には、特に我れといふものがない。我れと人、我れと物との區別もなく、所謂る萬物一體である。從つて、諸侯に仕へて、一身の名利を得やうともしなければ、家に一物の貯へがなくとも、晏如として憂ふるを知らぬ。而も、萬物を我れとして、その惠みが、禽獸に及び、更に無心の草木にも及ぶ。凡夫の及ばない所であるが、何人も、こゝに多少の工夫を積んで、我

執の心を緩やかにする必要はあらう。我執は、苦みの因である。

謙信必死の説

＝山川の末に流るゝ栃殼も
　　みを捨てゝこそ浮ぶ瀬はあれ＝

河中島の戰ひに、上杉謙信は、單騎、敵將武田信玄の牙營に迫つて、「流星光底、長蛇を逸す。」の壯快事を演じた。

主將として、餘りに輕々しいやうであるが、謙信には、時々、この種の思ひ切つた行動があつた。永祿四年、武藏の忍城を攻めた時など、彈丸、雨と降り濺ぐ陣頭に立つて、平然としてゐた。

やがて、馬首を回さうとすると、城中に聲があつて、

『敵に背ろを見せられるか。卑怯！　卑怯！』

と呼ぶ。謙信は、再び敵に面して立つた。敵は、銃先を攢めて、謙信を亂射した。一丸も中らない。謙信は、

『もうよからう？』

といつた風で、笑ひながら、他方へ向つた。

後で、老臣宇佐美良勝が、

『大切なる御身を以て、餘りに御輕卒ではござりませぬか。』

と諫めると、謙信の曰くに、

『生を必する者は死ぬ。死を必する者は生きる。要は、心志の如

何に在る。この心を得て、堅く守持する者は、火に入つても燒げぬ。水に入つても溺れぬ。死生に關はるものではない。自分は、この理を明かにして、三昧に入つてゐる。生を惜しみ、死を厭ふのは、またまだ、武人の心膽ではない。』

とあつた。

蓋し、謙信は、益翁宗謙禪師に參じて、略ぼ禪の宗趣を得てゐた。不識庵と號したのも、不識の公案に基くといふ。

○西人の語に、「勇の中には安全あり。」といふ。亦たこの意に外ならぬ。

けん女の忠孝

＝五倫とて品は五つに別るれど
　　盡す心は誠こそそれ＝

三河の國幡豆郡深池村の農夫甚平の娘けん女は、幼時、父を失ひ、家の貧苦に、そこゝへ子守奉公に行き、最後には、明和四年頃、上今川村の清七といふへ雇はれた。主人の氣にも入り、年久しく仕へる中、清七夫婦、その子供等も、相踵いで死に、殘るは、たゞ姉のみとなつたが、見捨てるに忍びず、後には、給金の定めもなくて、依然、主家に留まつた。

けん女の母は、至つて丈夫な人で、老の手業に、糸を繰つた。繰り溜ると、けん女が行つて、機を織る。一反なれば、その日に

織り、二反なれば、夜をこめて織り、織り上げたのを、近所の親類を頼んで賣り、綿、米などに代へて、母に送つた。

又た、薪は、主人の許に貯へて置いて、毎朝、二三把づつ、十町に餘る道を持ち運んで、而も、主人の事を缺かなかつた。

それを見る人は、

『お前の孝行は、何とも感心の外はない。寧そ、阿母と一緒に暮したら何うかね。』

といつたが、けん女は、

『ですけれど、今更、主人の不幸を見捨てるなぞは、到底、出來ませんから……』

と答へた。

その他、何か珍らしい物があれば、母に送り、主人から與へられる仕着も、母に着せて、自分は、古い物のみを着るなど、忠孝の行ひ、世の常でなかつたので、寛政三年、領主から、褒美の米を與へられた。

♡けん女の行ひは、所謂る忠孝兩全なるものである。忠孝兩全といへば、甚はだ難かしい事のやうであるが、忠孝は、元來、兩全であるべきものである。孝子は必らず忠臣、忠臣は必らず孝子——斯うなくてはならぬ。忠孝のみではない。五倫・五常、その一つを全うする者は、又た、他のすべてを全うする筈である。相手と事柄とによつての相違で、これを行ふ心に至つて

は、全く同一である。誠の一つに歸する。誠とは何？言志錄にいふ、「雲煙は、巳むを得ざるに集まる。風雨は、巳むを得ざるに洩る。雷霆は、巳むを得ざるに震ふ。これ、以て至誠の作用を觀るべし。」と。孝子が親に孝行を盡すのは、理屈でも何でもない。至情、巳むを得ずして、こゝに出るのである。誠、畢竟、至情の意である。五倫、五常、すべて至小の發露である。一を全うする者は、又た、他をも全うしなければならぬ。

利兵衛の舊主

＝忠孝といへば難きに似たれども
己が誠を盡すばかりぞ＝

享保の頃、江戸に木揚利兵衛といふがあつた。船の荷物を陸へ揚げること、これを木揚といふ。利兵衛の生業が、それであつたので、以て姓としたのである。幼時仕へた舊主人の家が、衰へ果てゝ、九十ばかりの老婆たゞ一人、賴むよすがもなくなつたのを養ふさへあるに、自分の不在中、妻の仕へ方が、若しや粗末ではあるまいかと、夜が明けると直ぐ、仕事先へ負つて行つて、物を敷いて坐らせ置き、自分の食物を別けて遇すなど、何から何迄、行き屆いた世話をした。

この事が官に聞えると、官は、これを賞して、物を賜はつた。世間でも、廣くいひ傳へたので、江戸のみでなく、京都邊でも、

利兵衛の姿を繪に書き、忠義の行狀を詳しく記して、

『木揚利兵衛、仁義禮智信……』

と呼び歩いたとか。

♡利兵衛の忠義、亦た、これ、至情に出たのである。舊主の不幸を見るに忍びず、引き取つて世話をしたのである。利害を計量し、外聞を考慮しての忠孝は、到底、行き届くといふわけには行かない。どこかに手落ちが出來る。永くは持たない。永い間には、必らず怠りが生じる。忠孝その他一切の德行、皆、至情に出たものでなければならぬ。

南洲の鐵舟評

＝我れ彼れと何名を變へて爭はん

一切諸法空の空なり＝

江戸開城の際、海江田信義が、府庫を調べると、在金が、意外に少い。立會の山岡鐵舟を顧みて、

『もつとある筈ぢやが……』

と咎めると、鐵舟は、

『金の事なぞ、江戸の武士は、とんと知らない。』

痛烈に答へたので、海江田は、大に赤面したとか。鐵舟は、眞個、武士らしい武士であつたのである。

西郷南洲も、この鐵舟には感心してゐた。明治元年三月、南洲

は、總督宮參謀として、駿府へ入つた。そこへ、勝海舟の命を帶びた鐵舟がやつて來て、寛大の處理を乞うた。南洲は、その時の鐵舟を語つて、

『山岡といふ男は、念頭に、敵味方の思ひがないらしい。いきなり、靜岡の本營へ飛び込んで來たから、敵の中を、江戸からこゝ迄何うして來た？　と尋ねると、歩いて來たといふ。では、敵を見なんだかと訊くと、澤山の兵士が、行列なぞをして、立派に見えたと答へて、淡然としてゐた。まあ、始末に困る男さね。』

蓋し、鐵舟は、餘程、禪の修行を積んでゐたのである。

♡鐵舟に、敵味方の思ひがなかつたのは、畢竟、我れがなかつたのである。

我れがなければ、彼れもない。敵も味方も、一列一體、たゞ人間である。偉人の心境、眞に、これ、天空海濶！

名人太郎秀政

主家來程よく舵を取り合うて
浮世を渡る屋臺船かな

元龜、天正の頃、越前の北庄城にゐた堀久太郎秀政は、下を使ふのに、士分以下、足輕に至る迄、各その情を盡すことを第一とし、決して無理、非道をしなかつた。

例を擧げると、或る時、奉行の從者と荷を持つ者とが、荷の輕

重を爭ふのを聞いて、

『どれどれ。』

と、自分で背負つて見て、

『予の力は、あの者よりも優つてゐる。けれど、一里も負うて來たので、大分、疲れた。持てぬといふのも道理ぢや。』

と裁斷した。

又た、家に泣き面の、不景氣極まる男がゐた。目からは、絶えず涙を流してゐる。眉を顰めてゐる。一擧一動、病人然として、見るからに、陰氣になる位ゐ。同僚は、

『不吉な男ぢや。』

と嫌ひ、果ては、秀政に告げて、暇を出させやうとした。秀政は、

『否！』

とかぶりを掉つて、

『佛事、葬禮なぞの使者には、持つて來いぢや。大名の家には、あんなのも、扶持して置く必要がある。』

といひ、依然、人並に使つた。

であるから、部下中、一人として秀政を怨む者がな！、何れも喜んで命を奉じた。世に秀政を名人太郎と綽名したのは、所詮、人使ひに心を用ゐたからといふ。小田原の陣中で歿した。年は、

まだ三十八であつた。

○人を使ふ者は、宜しく秀政の心がけがあるべきである。此言をいふのが、主人の能ではない。

島の浮田秀家

＝世の中の常なき事を外にして
何か佛の道に入るべき＝

備前中納言浮田秀家は、一萬八千人の將として關ヶ原に戰ひ、一敗して、伊吹山から美濃の白樫村へ落ち延び、暫時、そこに隱れて、更に薩洲へと下り着き、島津氏に倚つた。その事が聞えると、將軍家康は、死一等を減じて、八丈島へ流した。まことに、苫葺く庵、竹の編戸、雨風をさへ凌ぎかねつゝ、秀家は、黒木の柱を削つて、一首の歌を書きつけた。

藻鹽燒くうきめ苅る身は浦風の、とふばかりにや佗ぶと答へん。

その後ち、備前兒島の商船が、風に放たれて、八丈島へ漂着した。秀家は、最早九十餘りになつてゐたが、故郷の者と聞いて、いと懷かしげに、種々の物語をした。

『備前には、誰れがゐる？』

『新太郎少將がをられます。』

と答へると、

『誰れの事か知ら？』

と考へ、家老の名を聞いて、

『さては、池田の家ぢや』

と頷き、

『して、諸所に城が澤山あるか。城の北に伊勢の宮を建てゝ置いたが、何うなつたか。』

『伊勢の宮はございます。けれど、武家屋敷が、ひしと列んでをります。』

この言葉を聞いて、

『では、世が治まつたのぢや。亂世ならば、國境の城に武士共を分けて置くから、岡山には、そんなにゐない筈ぢや。今の話で、世の治まつたことを知つた。』

といひ、

我れこそは新島守よ隱岐の海の、荒き波風心して吹け。

後鳥羽帝のこの御製を短冊に書いて、彼の船人に與へたとか。

○昨は堂々たる大諸侯、今は孤島の新流人——餘りに激しい轉變ではあるが、人間の遭遇、往々にして斯くの如きものがある。富貴、榮華、恃むに足らぬ。人は、平素無事の日に於て、篤と世の無常を觀じ、眞に恃むべき何ものかを獲得する、これ、最も大事である。

豐公鶴を逸す

＝雲は眉月日は眼風は息
　海山かけて我が身なりけり＝

豐太閤秀吉の飼つてゐた鶴が、或る時、籠から逃げ出した。係りの者が、恐る恐る、その由を報告すると、秀吉は、

『異國へ逃げやうか。』

と尋ねた。

『飼ひ鳥のことで、そんなに遠方へは得參りますまい。』

「それなら、放つて置け。日本中にゐるのなら、やはり、予の籠

の中ぢや。』

といつて、別に咎めもしなかつた。

♡何等の大腹中！　大度量！　惜しむらくは、宇宙を我れとする迄には至らなかつたことを。

豐公の無常觀

＝夢の世を夢とも知らず夢を見る
　覺めたるも夢夢も亦た夢＝

豐公は、人に逢ふ毎に、

『何うぢや、何かよい夢を見たか。』

と問うたとか。辭世にも、

露と立ち露と消えぬる我が身かな、浪花の事は夢の又た夢。

と、やはり夢をいつてゐる。

♡人生は、そのはかないことに於て、一場の夢である。富貴の吉夢を見る者もあれば、貧賤の惡夢を見る者もある。彼れを幸福として喜び、此れを不幸として悲しむが、夢は、終に覺めなければならぬ。覺めた所を墓といふ。こゝに至つて、豈に復た幸と不幸とあらんやである。と知つて、浮世の旅は、宜しく輕い心持ちですべきである。

明智光秀の娘

＝降る雪に撓むと見えて折れぬこそ
柳の枝の力なりけれ＝

細川忠興の妻は、明智光秀の娘である。父が謀反を起した時、夫に向つて、

『父ながら、斯やうの企て事、よくなられやうはと思ひませぬ。瀧川、柴田なぞいふ人も、數多、をられること故、結局、敗軍の外はござりますまい。女の淺い智慧にも、淺猿しう存じまする。男の身ならば、鎧の袖に縋つてでも、お諫め申すのでござりますが、女には、力が及びませぬ。良人も、父に味方なさるなら、所詮、世の譏りをお免れなさるわけには參りますまい。篤とお考へ

なされませ。』

と、涙に沈んだので、稍や心の動いてゐた忠興も、遂に光秀に與しなかつた。

豊太閤は、或る時、諸侯の妻を伏見城へ招いて、種々、饗應した。忠興の妻は、斯くと聞くと、

『女の身として、たゞ一人、一室へ入つて、他人に見える法はない。若し自分をも召されやうとなら……』

といつて、懐剣を用意した。爾來、太閤の惡戯が止んだ。

石田三成は、西國の諸侯を語らつて、兵を興す時、その妻子を大阪城へ入れて、質としやうとした。忠興の妻は、傅につけられ

た河喜多石見、稲留伊賀、小笠原正齋の三人を呼んで、

『妾、こゝを出ること、思ひも寄らぬ。城中へ取り籠められるのは、恥辱ぢや。よく斷られよ。肯き容れられずば、これを限りと覺悟をしやう。』

と告げた。正齋は、

『殿には、東國へ御下向の砌、後で、何か事があつたら、正齋の計ひで、武將の恥ぢを晒さぬやうにせよ、と仰せ置かれました。敵が、奪ひ取りに參りましたら、その時、御覺悟をなされませ。』

と答へた。

所へ、石田方の使ひがあつて、再三、

『疾く、城中へお入りなされよ。』

といつて來た。堅く斷つたが、何としても肯かないでゐると、軍兵五百餘り、玉造口の邸を取り圍んで、

『何故、城中へは入られぬ？　可厭とならば、亂入して、奪ひ取りますぞ。』

と迫つた。女たちは、慌て騒いで、泣き悲んだ。けれど、忠興の妻は、

『斯うなるのは、覺悟の前ぢや。正齋、介錯を賴む。生きてゐる中、見えなんだ人たちに、死んでの後も、顏を見られるのは、よくあるまい。』

と、顏に覆面を打ちかけ、括り袴を着け、刀を拔いて、胸に突き立てた。正齋は、薙刀を揮つて介錯した。

そして、その場で腹を切らうとすると、正齋の小性が走つて來て、

『奧方と同じ室で御自害なされては、後の誹りがございませう。』

と注意した。正齋は、頷いて、

『餘りのお傷はしさに、つひ、忘れてゐた。』

と、障子の外へ走り出て、家に火をかけ、熖々たる炎の中で、石見共々、腹を切つて死んだ。

醜かつたは、伊賀である。彼れは、光秀から附けられた者で、

第一番に、主人に殉すべきであつたが、人込に紛れて落ち失せ、永く、士人の指彈を受けた。

♡夫を諫めたのは、智である。太閤に見えなかつたのは、仁である。最期の事は、勇である。忠興の妻は、女ながらも、三德を兼ね備へてゐた。偉いかな！

乞食金を拾ふ

＝形こそ深山隱れの朽木なれ
心は花に爲さばなりなん＝

享保の某年、押し詰つた十二月十七日といふに、江戸室町越後屋吉兵衛の手代市十郎が、用達しの途中で、金三十兩入りの袋を

落した。その頃の三十兩は、かなりの大金である。殊に主人の金とて、青くなつてしまひ、所詮、ないものとは思ひながら、元と來た道を取つて返し、尋ね尋ねする程に、一人の乞食がゐて、

『何を尋ねなさる？　若しや、金ではございませんか。』

といふ。市十郎は、嬉れしさいふばかりもなく、ありの儘を語ると、

『然やうか。その金は、手前が拾つて置きました。多分、落し主が尋ぬて來られるであらうと、最前から、こゝに待つてをりますので、貴方に違ひがなければ、直ぐお渡し申します。』

との言葉に、市十郎は、金額、一緒に入つた證文などのことを

一々、いひ聞かせた。乞食は、頷いて、

『では、疑ひもありませんから……』

と、懐ろから取り出して、袋の儘、市十郎に渡した。

市十郎は、餘りの事に、且つ驚き、且つ喜び、その儘には濟し難くて、内五兩を取り出し、

『せめてこれだけでも、お前の得分にしてくれよ。』

と差し出した。乞食は、かぶりを掉つて、

『否、頂くわけはございません。』

といつて、受けやうとしない。

『この金は、最早、ないものと思つてゐたのに、お前の志で、

再び私の手へ戻つた。殘らず自分の物にするわけには行かない。少いけれど、是面、受け取つてくれなきや困る。』

強つて渡さうとすると、乞食は、言葉を改めて、

『よく考へて御覽なさい。その五兩を貰ふ心なら、最初から、三十兩を返しませうや？　慾で拾つて置いたのではございません。何ういふ人が落したのか。主人の金なぞであつたら、嘸、難儀に及ばれやう。他人に拾はせたら、落し主には返るまい、と然う思つて、拾つて置いたのでございます。今、貴方へお返しすれば、私の志通りになつたわけ。では、お暇いたします。』

とばかり、そこを去つて、見返りもせぬ。

市十郎は、跡を追つて、取り敢へず、懐ろから若干の金を取り出し、

『今日は、寒さも強し、歸られたら、酒でも飲んで下さい。ほんの寸志だ。』

と與へた。乞食は、

『これは、お志でございますから、頂戴いたします。』

と快く受けた、名を尋ねると、車善七の手につく八兵衛といふ者とのことであつた。

市十郎は、家へ歸つて、この由を主人吉兵衛に話した。吉兵衛は、感涙を催して、

『何卒、その五兩を八兵衛にやりたい。明日、善七の家迄持つて行つて、善七にもいひ聞かせ、八兵衛に合點させて、左右、受け取るやうに計ふがいゝ。』

と、翌早朝、手代頭を添へて、市十郎も善七の許へやつた。

所が意外、善七の言葉に、

『その八兵衛は、昨夜、どこかで金を貰つて來たといつて、私にも見せましたが、それから、仲間の乞食共を呼び集め、酒、肴を調へて、人にも食べさせ、自分も、食べました。何分、食べつけないものを食べ過ぎて、食傷でも起し出したか、今朝、夜明け頃に、急に死にました。

とある。

市十郎は、大に驚き、死骸を見屆け、善七に、

『何卒、この死骸を貰ひたい。粗末に外へやらないやうに賴む。』

といひ合せ、歸つて吉兵衛に話した。吉兵衛は、早速人をやつて、八兵衛の死骸を引き取り、彼の五兩の金で、手厚く本所の無緣寺――回向院――へ葬つた。

♡駿臺雜話の著者室鳩巢は、この事を評していつた、「思ふに、八兵衛、たゞ人に非ず。如何なれば、乞食の黨には入りにけん。定めて、元は賤しからぬ者にてありしが、孤貧、極まりて、家もなく乞食して歩く程に、外の乞食と一列になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらん。然れば、生存へて甲

斐なき事と思ひしか、幸ひに金を得て、酒、肉を求め、その黨と歡會しける程に、これを限りと思ひて、自ら喉など締めて死にけるにもあらん。計り難し。この八兵衛を士とし、又は、人の上に置くとも、權柄をもて人の物を乞ひ求むるやうの事は、決してすまじき者なり。然れば、世には、名は、歴々の士太夫と呼ばれて、實は、乞食なる人もあり。この八兵衛は、名は、乞食なれども、實は、士太夫といふべし。」とまことに、適評である。今の世にも、名は、官、公吏と稱し、學者と稱し、政治家と稱し、宗教家と稱し、教育者と稱し、名譽職と稱し、議員と稱して、實に乞食なる者がたんとある。又た、「吉兵衛の義に感ずること、商賈には奇特といふべし。」然り、斯くの如きは、所說、今の商人輩にはない所である。加賀侯の御用聞きといへば、商人ながら、士風に化する所があつたか。

菰被りの名言

＝居士衣着たる翁は然はなくて
絹着ぬ人に悟りしもあり＝

加賀の國の野田山は、前田家先祖代々の墓のある處で、家中の士も、多くは、この山の麓に葬るの例であつた。自然、毎年の中元には、燈籠を供へる。厚祿の家では、假小屋を造つて、番人をつけて置くが、一般には、灯し捨てにして歸る。すると、惡黨共が來て、火を消し、臘燭を盗み取るといふ風があつた。

或る時、例の惡黨共が、片つ端から、臘燭を盗んでゐると、傍

に乞食體の男が、菰を被つて臥てゐて、

『人が、先祖の爲めにといつて、墓に供へたものを、そんな狼籍をする。善くない事ぢや。止めさつしやれ！』と制した。惡黨共は、

『菰被りの身で、餘計なことをいふな。』

と罵つた。乞食は、冷然として、

『お前たちのやうな事をせぬから、菰を被るのぢや。』

とやり返した。

○「不義の富貴は浮べる雲。」と淨瑠璃の文句にあるが、世間、不義ならぬ富貴は、めつたにない。金持ち自身は、自分の既往を顧みて、何等、恥づる所がな

いかも知れぬ。それは、良心が麻痺してゐるのである。金を溜める間には、商略又は懸引なる名の下に、仕入先を欺いたり、得意先をごまかしたりして、法外な利益を貪つたこともあらう。出入の聯人を泣かせたこともあらう。國家に事あるを機會として、暴利を占めたこともあらう。今の所謂る成金の中には、米の値段を釣り上げて、同胞を苦しめ、それによつて、暴富を致した者が多々ある。それでゐて、親戚、朋友、知人の難儀は、これを餘所に視て顧みない。況んや、國家、同胞の事などに於てをやである。彼等の富貴は、殆んど全部が、不義の富貴である。彼等の大多數は、野田山へ臘燭を盗みに行つて、蔑被から怪氣焔を浴せかけらるべき連中である。咄！

尊德の强意見

＝人の爲め己が誠を盡さなん
　毀り譽れは左にも右にも＝

二宮尊德が、野洲櫻町の陣屋にゐた頃、出入の疊職入に、源吉といふがあつた。口も利けば、才もあり、素より沒分曉漢ではなかつたが、酒が好きで、その上、遊惰を事とし、年中、貧乏してゐた。或る年の暮、最早正月に間のない或る日、尊德の許へ、餅米を借りに來た。尊德は、

『お前のやうに、毎日、家業を怠つて、錢さへあれば、酒を飲む者が、正月ぢやからといつて、人並に餅を食はうとは、考へが太過ぎる。正月は、不意に來るのぢやない。米は、偶然に得られる

のぢやない。春耕し、夏耘り、秋苅つて、初めて米になる。お前は、耕しも、耘りも、苅りもせぬ。米のないは、當然ぢや。今、貸してやつたとて、何うして返すか。借りて返す道がなければ、罪人になるのぢやぞ。正月、餅が食ひたかつたら、今日から、酒を止め、遊惰を改めるがよい。來年の正月は、餅を食はずに、過ちを悔へよ。』

と説諭した。源吉は、大に悟つて、

『成程、心得違ひでございました。仰せの通り、來年の正月は、餅を食はずに、過ちを悔うことに致しませう。』

と誓ひ、悄然として辭し去つた。

時に、門人の口吟んだ狂歌に、

言行(源公)が一致ならねば年の暮、疊み重なる胸の苦しさ。

この時、尊徳は、手に金を握つてゐて、門を出やうとする源吉を呼び返して、

『俺のいふ事が解つたか。』

『眞實、肝に銘じました。生涯、忘れませぬ。今日からは、酒を止めて、勉強致します。』

重ねて誓つた。尊徳は、

『それなら、結構ぢや。』

といつて、白米一俵、餅米一俵、金一兩に、大根、芋などを添

へて與へた。源吉は、深く感激して、酒も飲まず、怠らず、生れ變つたやうになつて、一代を終つた。

♡世間、知人などから借金を申し込まれて、尊德の如くに强異見を呈する者はある。尊德の如くに、相手を傷ましく思ひ、親切を盡す者はない。誠を以て異見する者はない。その異見が、相手の反感を誘ふに止まる所以である。人なして過ちを悔いしむるに足るものは、たゞ一つ、誠のみであることを知らなければならぬ。

鮭延主從の誼

＝主從と二つの名もて呼び做せど

たゞ一身の上と下なり＝

最上義光の長臣鮭延越前は、祿一萬二千石を食んでゐたが、一朝、最上が滅びると、忽ち、天涯流落の身となつた。けれど、平生、家人に慈悲深くあつたので、二十人の士、主人を見捨てかねゝ、

『各自、乞食して養はう。』

と誓ひ、これに附き從つた。

後ち、越前は、土井大炊頭利勝に召し抱へられ、五千石を給せられた。乃はち、擧げて二十人に二百五十石づつを分け與へ、その身は、二十人の許に、一日替りに養はれて、一生涯を終つた。

越前の死後、二十人して、一字を下總の古河に建立した。鮭延

寺、即はちそれである。

♡鮭延主從は、義は、主從であつたけれど、親は、父子であつた。主從の關係は、當然、斯くあるべきであるが、今の主從には、利害の觀念があるばかりで、主人は、奉公人を視るに金儲けの道具を以てし、奉公人は、主人を視るに壓制君主を以てし、動もすれば、互ひに相爭はうとする。罪の何れに在るに論なく、漫漫しい次第である。今の主從に、鮭延主從程の親愛があるならば、猛々たるデモクラシーの呼號など、忽ち消えてなくなるであらう。

幡隨院長兵衛

＝俠と義と勇を命に世を渡る

男の中の男一匹＝

幡隨院長兵衛は、木挽町森田座での喧嘩に、水野十郎左衛門の配下金時金左衛門を取つて壓へ、且つ、棧敷の十郎左衛門を嘲り罵つた。

十郎左衛門は、祿五千石を食み、旗本奴の隨一人として、平生猛暴の擧多く、江戸市民の苦しむ所となつてゐた。町奴の長兵衛等は、何とか、これに一擊を與へたいものと、その機を窺つた。今や、その機が發見された。町奴等は、三斗の溜飲を下げることが出來た。

それだけに、十郎左衛門は、口惜しかつた。

後ち三日、數人の從者を從へ、馬上、長兵衛を訪ねた者がある。

『拙者は、水野十郎左衛門の使者でござる。』

との事に、長兵衛は、これを座敷へ通して、

『して、御用は、何でござりまする？』

と問うた。使者の曰くに、

『主人十郎左衛門事、久しく貴殿のお名を承はつてをります所、先日、森田座でお腕前を拜見致し、益す感心致したに就いては、世評は左にあれ、十郎左衛門は、當つて碎ける男でござる。何卒御懇意に願ひたい。就いては、一度、お出で下さることなら、十郎左衛門、本懷の至りに存ずる。その爲め、拙者保正庄左衛門、

突然、お伺ひ致しました。』

とある。長兵衛は、厚くその好意を謝し、

『では、明日、參上いたしまする。』

と答へた。保正は、滿足して辭した。

後で、長兵衛は、考へた。彼れ水野は、自分を招いて、怨みを報いやうとするのに相違ない。と知つて往かなければ、卑怯の譏りがあらう。唐犬、放駒などに謀るのも、臆したものに似てゐる。何、死ぬ覺悟でゐれば、天道、外道、少しも恐るゝに足らぬ——斯う思つた。

乃で、翌日になると、羽織、袴を着け、關孫六作二尺三寸の刀

を帶して、たゞ一人、水野邸を訪ひ、中の口から、刺を通じた。

近侍の者が出て、

『何卒、玄關からお上り下さい。』

『否、下賤の者でございますから……』

『主人の命令で、遠慮は御無用！』

強つての言葉に、長兵衛は、玄關から上ると、昨日の保正が面接して、

『暫時、お待ち下されよ。』

といふ。所へ、小姓が、茶菓を持つて來る。定光定平、末武竹右衛門、綱五兵衛——これに保正を加へて、四天王と號した——

などが、懇懃に待遇す。

稍あつて、長兵衛は、書院へ案内された。刀を去らうとして、又た、萬一を慮り、帶した儘で、書院へ入ると、上座に十郎左衛門がゐて、

『近う！』

と命じ、切りに長兵衛の勇力、手腕を褒め、

『予の祿は、少いけれど、貴公の爲めになら、割くことを吝しまぬ。今日は、緩々、話すとしやう。』

などと、種々、甘言を弄し、盃を執つて、長兵衛に與へた。長兵衛は、厚く光榮を謝して、返盃しないでゐた。十郎左衛門は、

『盃を……』

長兵衛は、膝行して盃を献じた。侍る所の女は、艶麗、花の如くである。二汁、五菜の膳部は、噂に聞く土鼠の汁でなく、蛙の鱠でなく、皆、山海の珍味である。長兵衛は、少しく意を安んじた。

斯くて、酒の正に酣なる頃、

『お風呂がようざざりまする。』

と報じて來た。長兵衛は、勧められる儘に、風呂へ行つた。そして將に入らうとすると、十郎左衛門の臣中、力のある數人が、急に迫つて、長兵衛を倒し、高手、小手に縛り上げてしまつた。

所へ、十郎左衛門が、刀を提げて、濶歩して來た。長兵衛は、十郎左衛門の卑怯を罵つた。十郎左衛門は、せゝら笑つて、

『貴様を縛らうと、久しく然う思つてゐたのぢや。騒ぐな！』

といふと、直ぐ、長兵衛を斬つて除けた。

その後幾日、長兵衛の死骸は、龍閑橋の下で見出された。十郎左衛門が投棄したのである。放駒等は、憤激して措かず、他日復讐すべきを約し、死骸は、下谷清島町の源空寺に葬つた。

○これを道徳の上から見て、當時の所謂る男伊達の徒に、幾何の價値を置き得るかは、頗る疑問である。たゞ、その俠と義と勇とを取る。無學の彼等、その伏にも、義にも、勇にも、幾多の間違ひはあつたけれど、それは、已むを得ぬ

ことといつてよから。

勘解由の決心

＝君の爲め國の爲めとて盡さなん
我が身一つをなきものにして＝

大阪冬夏の陣後、德川幕府の基礎、漸く固く、天下は、追々、泰平の氣運に向つて來たが、上下枕を高くして、安眠し得る迄には、なかなか手間が取れた。三代家光、四代家綱、五代綱吉と、時代は移つたが、盜賊、無賴の徒が、市中を横行して、夥しく良民を苦しめた。旗本奴、町奴等の男伊達が、弱きを扶け、强きを

挫くと稱して、喧嘩を事とし、頻りに暴威を揮つたのも、この頃である。要するに、當時の世間は、まだまだ物騷を極めて、充分には戰國氣分を脱し得なかつた。

水野十郎左衞門、幡隨院長兵衞のいきさつは、やはりこの頃の事である。その十郎左衞門は、四代將軍の寶文四年三月某の日、無作法の罪によつて、切腹を仰せつけられた。これを手初めに、幕府は、旗本奴の全部を召し捕つて、遠島又は追放に處した。

が、まだ町奴が殘つてゐる。こゝに於て、五代の貞享中、新たに盜賊改役を拜命した中山勘解由は、非常の決心を以て、これが逮捕に着手した。就職早々、その朝暮崇信する佛壇を釘づけにし

て、

『不肖勘解由、今度盗賊改役を仰せつけられました。この身は、從ひ、金輪奈落に沈みませうとも、惡漢共を一掃して、大江戸八百八町、民が、夜も、戸を閉てずに寢られるやうにせぬ中は、再びお目にはかゝりませぬ。』

と誓ひ、且つ、

『役儀の中は、先祖の年忌が來ても、一類中、病死の者があつても、寺參りは致しますまい。前以て、御承知置きを願ひます。』

と披露し、先づお茶の水に住む大佛師三婦を縛し、その死を宥して目明とし、未だ旬日ならざるに、唐犬權兵衛、放駒四郎兵衛

薩摩源五兵衛等三十七人を召し捕り、それぞれ吟味の上で、その全部を品川の鈴ケ森に刑し、これを梟した。江戸の男伊達は、こゝに至つて、全然、その迹を絶つた。

勘解由の辣手は、更に他の方面にも加へられ、市中の惡漢共、或ひは刑死し、或ひは奔竄し、復た良民を苦しめる者がない。勘解由の理想通り、大江戸八百八町の民は、爾來、枕を高くして眠ることが出來た。

♡凡そ官に在る者は、職を奉ずること、勘解由の如くに獻身的でなければならぬ。單に顯要の地に在ることを榮譽とし、俸祿を貪り、家門を營むに汲々して、國家、民人の爲めになら、この身、金輪奈落に沈むとも厭はないといふ、

献身的精神を缺いたのでは、成績の擧らうわけはない。今の役人等、勘解由に對して、能く顏色があるか。

唐犬の權兵衛

‖醜さの數ある中に弱きをば
　虐ぐる程醜きはなし‖

貞享某年某月某月、盜賊改役中山勘解由の配下が、唐犬權兵衛を襲ふと、權兵衛は、朝來、他へ出て、家には、母と妻子、僕一人がゐた。行先を尋ねると、

『存じませぬ。』

といふ。隣家で詢いても、

『存じませぬ。』

といふ。殘念ながら、母等四人を縛して、引き揚げた。人質の意味である。

その日、權兵衛は、叔母の病氣を見舞つて、三の輪へ行つてゐた。歸ると、町内の者が、留守をしてゐる。

『今朝、捕吏がやつて來た。お前さんがゐないものだから、阿母さんたちを縛つて、連れて行きましたよ。大變なことになりましたね。』

との事に、權兵衛は、溜息を吐いて、

『阿母や子供が召し捕られたとあつては、その難儀を餘所にして、逃げ隱れるには忍びない。これから、自首して出ます。お氣の毒だが、何方か御同道下さい。』

と告げ、重立つ數名に伴はれて、自ら中山邸へ訴へた。

曰く、

『今朝、手前の不在中へ、お役人が見えられまして、母、妻子をお召捕になりましたとの事。手前は、驚いてしまひました。母や子供には、何の罪もござりませぬ。何卒、手前をお縛り下されて、母たちには、御寛大の御處置を願ひまする。』

これ、至誠の言である。「至誠にして動かざる者は、未だこれあ

らざるなり。」この由、勘解由へ取り次がれると、

『流石、人に知られた權兵衛ぢや。他とは違ふ。母や妻子は、宥して遣はす。早々、權兵衛を縛つて、庭へ廻せ。』

と命じた。

庭には、母以下が縛られてゐた。權兵衛は、一見、

『おゝ。』

と驚いて、

『私の爲めに、苦しい思ひをさせた。濟まない！　濟まない！』

と謝し、

『私の身は、何うなることやら。多分、これが、一生の別れだら

う。大切になさい。』

此方は、たゞ泣くばかり、返す言葉もなかつた。

斯くて、母以下は、放免された。權兵衛は、數日の後ち、他の仲間等と一緒に、品川に刑せられた。

♡當時の男伊達なる者、畢竟、無頼漢に過ぎない。たゞその俠と義――洗練されたものではないが――を取る。今の人の我利一點張りなのとは違ふ。

刑部感激の涙

＝繪に書いた餅は喰はれず世の中は
誠でなけりや間には合はせぬぞ＝

豐太閤は、諸大名が、御機嫌伺ひに來ると、酒宴を設けて歡待し、將棋を差したり、茶を點てたり、歌舞を催したり、音樂を奏したり、各の、その好む所に隨ひ、歡を盡して罷むを例とした。

或る時、諸大名の集まつたを幸ひ、茶會を開き、太閤自身、茶を點てゝ侑めた。飲み廻しの茶碗が、順次、大谷刑部少輔吉隆へ來ると、吉隆は、受けて飯まうとして、茶碗の中へ、鼻汁を垂らした。吉隆は、人も知る癩病患者で、鼻汁は、即はち血膿である。次へ廻すわけには行かぬ。大に當惑してゐると、太閤は、早くもそれと知つて、

『刑部、その茶は、出來が惡い。點て直すから……』

と、茶碗を引き取り、自分でぐつと一喫し去つて後ち、更に點てゝ、一同に侑めた。吉隆は、ほつとした。と同時に、深く太閤の恩に感じ、一死、これに報いるの心を決したといふ。

○これを目して、英雄の籠絡手段とするのは、太閤を知らないのである。太閤には、織田信長の家にゐる時から、數ば、この類の行爲があつた。部下は勿論、その他に對しても、温かい同情を持つてゐて、よく人の爲めに計つた。然ればこそ、群雄を駕御して、六十餘州の主となり得たのである。籠絡手段は、小策士の弄する所で、眞の英雄、例へば太閤如き人の事ではない。

小楠危を免る

＝遲れては拂ふ方なき雪ならん
　積らぬ先に心せよ人＝

勝海舟は、嘗て横井小楠を評して、

『小楠は、佐久間象山よりも偉い。象山は、文筆の人に過ぎぬ。小楠は、見識の人だ。』

といつた。見識の人――これが、世の定評である。

夙に開國論を唱へたのも、見識の優れてゐた結果である。

從つて、機智にも富んでゐた。或る時、二三の友だちと、江戸常盤橋外の一旗亭で飲んでゐると、土佐藩士と號する者が五人、

『お目にかゝりたい。』

とやつて來た。小楠は、早くも刺客と察して、階下へ避け、ぶつさき羽織を脱き捨て、帶を貝の口に結び直し、手拭を肩にかけ、敵の目を光らせてゐる門口を、腰低く、

『御免下さい。』

といつて出て、その儘、姿を隱した。

斯くて、友だちは殺られてしまつたが、小楠のみは、危急を脱した。

○友だちを捨て、置いて、自分一人、命を助かるなどは、不信の爲とも評されやう。その機智に至つては、甚はだ學び易くない。心を修養に存する者は、これ等の些事にも、幾分、工夫を積むべきである。

良覺のあだ名

＝剃りたきは心の中の亂れ髮
　つむりの髮は左にも右にも＝

昔し、比叡山の大僧正良覺といふ僧は、藤原公世の兄で、名門の出ながら、極めて腹の惡い人であつた。寺の傍に大きな榎の木があつたので、人は、綽名を榎の僧正と命けて憎んだ。良覺は、

『可厭な名を命けをる。』

と怒つて、その木を伐り倒した。

木を伐ると、根が殘つてゐる。人は、伐杭の僧正と綽名した。

愈よ立腹して、根を掘り取つてしまつた。すると、跡が、大きな池になつた。人は、又々、掘池の僧正と綽名した。

♡姑息の手段によつて、惡名を去らうとするのは、到底、むだである。根本的に、自分の心得方を改めるの外はない。

お輕と内藏助

＝血もあらん涙もあらん强きのみ
我が武士の道ならめやは＝

大石内藏助は、山科隱棲以來、毎日のやうに、京の島原、伏見の撞木町に遊んで、尙ほ足らず、時には、若衆瀨川竹之丞といふ

を連れ、墨染の法衣に、一升德利を提げ、祇園邊りへ浮れ込み、醉うては、大道に打つ倒れて、正體がないなど、痴態、狂態、お話にならないやうな、不行跡の限りを盡した。さては、

大石輕うて張拔石。
赤穗で恐うて阿呆浪人。

などの落首さへあつたが、大石の眞意は、斯くして、敵の間諜を欺き、これに油斷させやうとしたのである。

一擧の期迫つて、内藏助は、手元に長男松之丞——後の主稅——のみを置き、妻子を妻の實家但馬豐岡の家老石束源五兵衞に預けた。そして、相變らず酒色に耽り、相變らず遊興を事とし、復

雛の事など、てんで念頭にないもののやうに振る舞つた。果然、敵の間諜は、油斷して來た。吉良上野介も、大分、警戒を弛め出した。内藏助は、こゝぞといつたやうに、愈よ益す、遊冶、放蕩に身を持つた。

内藏助の一族に、進藤源四郎といふがあつた。夙に一黨に加はつて、衆の推服する所となり、後ち、盟ひに背いた一人である。内藏助のこの體を見ると、

『畢竟、獨身でゐるからぢや。』

と、京都一條寺町邊の二文字屋次郎右衛門の娘、名はお輕、艶名、世に隱れのないのを取り持つて、内藏助の側に置いた。

内藏助は、内心、笑止に堪へなかつたであらう。これも方便、面白い位ゐの考へで、表面、滿足げに持て做して、早速、お輕を山科へ迎へ取つた。

内藏助が、お輕を迎へて妾としたのは、無論、敵を欺く方便であつた。方便ではあつたが、人間の百行、人を方便に使ふ位ゐ恐い事はない。情を知つた内藏助は、お輕に對して、充分の愛を以て交り、東下の期も略ぼ決して、これを二文字屋へ返す時には、數々、餞別の品を取らせた。

のみならず、發足の前夜になると、態々訪ぬて行つて、別れを告げた。二文字屋の一家は、良雄の東下を訝かりながらも、名殘

を惜しみ、盃を侑めて、旅行を祝した。お輕は、打ち萎れて、

燈暗うしては、數行、虞氏の涙……

と微吟した。内藏助は、聞き咎めて、

『めでたい首途に、涙とは如何？　それそれ、日頃、手馴れた一曲を……』

と所望した。お輕は、琴を引き寄せて、

七尺の屏風は、躍るともよも踰えじ。羅綾の袂は、引かばなどか截れざらん。

と笑ひ、爪音に殺聲を籠めて彈いた。内藏助は、頷いて、

『珍らしや、今の一曲！　お輕然らばぢや』

と起つて、當時の僑居、梅林院へと立ち歸り、一夜明くれば、元祿十五年十月七日、二三の同志、他に從者を從へて、京都を發した。

♡内藏助は、勇士であつた。けれど、武勇一遍の勇士ではなく、血もあり、涙もあり、實に情に脆い人であつた。

右衛門七の父子

＝假名文字の數に合ひて武士の
いろはにほへと散りし花かも＝

矢頭長助は、一子右衛門七と共に、夙に大石内藏助に一味し、

赤穂退散の後は、大阪の堂島に借家住居をして、一擧の期を待つたが、その期は、容易に來ない。たゞさへ貧しい身の、浪人の坐食、三度の食にも、事を缺かうとして、圖らずも病氣に罹つた。斯くて、愈よ臨終といふ時、右衛門七を呼んで、

『この儘死ぬのは殘念ぢやが、天命、如何ともし難い。お前は、何卒、父の志を繼いで、本望を遂げてくれ。』

と遺言して、息を引取つた。右衛門七は、家主久兵衛に告げ、その手で、たゞ一領の着込を典して、費用を調へ、梅田の墓地へと葬つた、元祿十五年秋八月の事で、右衛門七、時に十七歳であつた。

すると間もなく、江戸へ下ることになつたが、困つた事には、着込がない。窮餘、久兵衛を欺いて、

『過日の着込、今の中に、手入をして置きたい。暫時、借りては下さらぬか。何、直ぐ返します。ほんの暫らくで宜しい。』

と眞しやかに話した。久兵衛は、

『宜しい。借りて來て上げませう。お待ちなさい。』

と答へ、質屋から取つて來て、右衛門七に渡した。右衛門七は、仕濟したりと、それを携へ、一通の書を久兵衛に遺して、母と共に出發した。

所が、少年の初旅、道中で女の關所切手の要ることを知らなか

つたので、遠州の荒井關迄來て、元來た道を大阪へ引き返し、母を殘して、單身、再び東下の途に就いた。

質屋は、大に立腹した。久兵衛は、

『あの小僧に、一杯喰はされたか。』

と口惜しがつた。

然る程に、その年師走の末、義擧の報が、上方にも傳はつた。一黨の中には、矢頭右衛門七の名も見えた。質屋も驚いた。久兵衛も驚いた。曩の立腹は、一變して感嘆となり、翌年二月、一黨の切腹に及んで、質屋と久兵衛と相謀り、右衛門七の爲めに、追善の法事を營んだ。

♡赤穂義徒四十七人の事蹟には、楚々、人を動かすものが多い。右衛門七の事は、殊にそれである。

陶侃勞を習ふ

＝習ふべき事の數々ある中に先づ習はなん勞の一字を＝

後漢の陶侃は、幼時、父を失ひ、且つ、家が貧乏であつた。范逵が訪ねると、母の湛氏は、髪を截り、それを賣つて、酒肴を調へた。侃が、世に出たのは、逵の推薦による。斯くて、官を進めて、荆州の刺史になつた時、好人王敦の爲めに、廣州へ在遷され

た。時に、百個の大瓶を置いて、朝は、齋の外へ運び出し、夕に齋の内へ運び入れるのを日課にした。人が、

『何をなさる？』

と尋ねると、

『俺は、今に力を中原に致す心組である。それ故、勞を習ふのぢや。』

と答へた。果せるかな、再び荆州に鎮し、八州に都督として、種々、偉功を奏した。

♡勞を習ふ――これ、新井白石の父の白石に敎へた言葉とその意味を同じうする。功は、勞に伴ふ。勞がなければ、功もない。功を欲する者、勿論、勞を厭つ

てはならぬが、それには、勞に慣れることが必要である。慣れゝば、勞も勞ではない。

公衡望を棄つ

‖誰れも見よ盈つればやがて缺く月の
十六夜の空や人の世の中‖

左大臣西園寺公衡は、望み次第、太政大臣に上れたけれど、『珍らしくもない。一の上で止めやう。』といつて出家し、竹林院入道と號した。一の上は、左大臣の事である。

すると、後ち、左大臣洞院實康も、これを聞き、滿足して、太政大臣の望みを抱かなかつた。

○兼好法師曰く、「亢龍の悔あり」とかやいふこと侍るなり。月、盈つれば缺け、物、盛りにしては衰ふ。萬づの事、先の詰りたるは、破れに近き道なり。」と。慾、制しなければならぬ。

證空上人の悔

＝壓へても堪忍袋なかりせば
何にか容れん疳癪の虫＝

高野山の證空上人、或る時、馬に乗つて京都へ上る途中、細道

で、これも馬に乗つた女に出遇つた。所が、その口取の男が、惡く馬を曳いて、上人の馬を堀へ落した。上人は、大に立腹して、

『これは、稀有の狼籍ぢや、四部の弟子といふ者はな、比丘よりも比丘尼が劣り、比丘尼よりも優婆塞が劣り、優婆塞よりも優婆夷が劣る、然る賤しい優婆夷の身で、比丘を堀へ蹴入れさせをる右今未曾有の惡行ぢやぞ。』

と怒鳴つた。口取の男は、けろりとして、

『何を仰せられますやら、一向、わけが解りませぬ。』

といふ。上人は、尙も敦圍いて、

『何をいふか。非修非學の男め！』

と、聲荒く罵つたが、さて氣がつくと、法師の身として、これは又た、無性に放言したものである。自分ながら氣恥づかしくなつた。後悔の面もちで、馬を引き返して逃げ去つた。

♡怒れば、必らず悔があるが、人間、時としては、怒らずにゐられない場合がある。要は、忽ち惡いと氣がついて、早速、怒りを收め、元の平靜に返るに在る。これ亦た、修業に待たなければならぬ。

井上新左衛門

＝心せよたゞ假初の言の葉も
刺ある程は物を破るに＝

評定所の役人に、井上新左衛門といふがあつた。天性疎直、いふ事にも、する事にも、少しも文飾がなかつたので、松平伊豆守に愛された。滑稽を好み、時々、奇言を吐く所は、東方朔に似てゐた。

或る時、どこからか鱈を献上した。將軍へ披露するに就いて、伊豆守が、一應、檢分すると、鱈に塵がついてゐる。伊豆守は、氣色を損じて、取次の者を叱つた。すると傍にゐた新左衛門が、

「否、鱈には塵が附物でございます。」

と妙なことをいふ。

「何故？」

『三番叟に、「ちりやたらり」といふではございませんか。』

この言葉に、伊豆守は、噴き出してしまひ、機嫌が直つた。

♡滑稽、決して悪くはない。單に人の顔を解くだけではなく、中に諷諭を寓し、聞く者の反省を促すやうなのなら、滑稽の上乘なるものである。正面から事を説いて、相手を立腹させさうな場合にも、滑稽を以てすれば、無事にその目的を達することが出來る。長者に言を進める際などには、最も賢明なる方法である。が、それは、自然に出る滑稽でなければならぬ。又た、些かでも、阿諛の心持ちがあつてはならぬ。

新左よく戯る

＝過ぎたるは及ばぬものと思ひ知り
たゞ何事も程々にせよ＝

これも、その時の事である。伊豆守が、周圍の者に、

『畢竟、物に念の入らぬ故ぢや。何事も、念を入れるに如くはない。』

と注意すると、新左衛門、又々、口を出して、

『各の様には、念の入つた方が宜しい。手前のやうな輕い者には、餘り念を入れると、却つて悪いこともございます。』

伊豆守は、聞き咎めて、

『念を入れて悪いといふ、そんなことがあるものか。』

『否、あるのでございます。昔し、唐の玄宗皇帝は、方士にいひつけて、楊貴妃の所在を尋ねられました。方士は、蓬莱宮へ行つて、貴妃に遇ひ、その事を復命するに就いて、何か證據になる物をといひますと、貴妃は、玉の簪を與へました。それを持つて歸ればよいのに、簪は、世間に幾らも類がある。これだけでは物足りないといふので、更に、玄宗と貴妃との内密話を聞いて歸りました。そして、その由を申し上げますと、玄宗は、大層、喜ばれましたが、又た思はれますには、あの話を知つてゐるからは、方士め、豫々、貴妃と通じてゐたのかも知れぬといふので、到頭、これを誅してしまはれました。即はち、念を入れ過ぎた爲めに、

命を失つたのでございます。』

と説明した。伊豆守は、

『新左が、復た、例の坐ろ言をいふぞ。』

と笑ひ、一座、興に入つたが、何ぞ知らん、伊豆守も、天草征伐の時、鐘の用心に念を入れ過ぎて、飛んだ失敗をした。

♡何事にも程度がある。「念には念を入れよ。」といふけれど、それにもやはり程度がある。

泰時無慾の德

＝我れといふ小さき心捨てゝ見よ

大千世界障るものなし＝

北條泰時は、北條九代の中に在つて、その人物が、最も卓出してゐた。

承久の亂に、京都へ攻め上つた序で、泰時は、栂尾の明慧上人に逢つて、

『某事、不肖の身を以て、重任に當り、群下に臨み、日夜苦心仕る。何として、衆を治め、爭ひを歇めることが出來ませうや。』

と問うた。明慧は、たゞ一言、

『無慾になり給へ』

と敎へた。泰時は、重ねて、

『某一人、無慾になればとて、群下は、無慾になりますまい。如何？』

と問うた。

『否、下に目をつけるに及ばぬ。卿だけ、先づ無慾になり給へ。』

明慧がいふと、泰時は、固く信じて、鎌倉へ歸つた。

左右する中、父義時が死ぬと、泰時は、その跡を襲いで、執權になつた。さて、弟たちに、所領、財寶を分けるのに、その大部分を與へ、自分は、かつかつに足るだけを取つた。二位の尼は、それを聞いて、

『卿の取分は、餘りに少いではないか』

と注意し、泰時が、

『某は、家督を受けましたこと故、何の乏しいこともございませぬ。たゞ、弟たちの豐かなやうにと、そればかりを思つてをりまする。』

と答へると、思はず感涙を催した。

果然、年を逐うて、親族、敬ひ愼しみ、鎌倉の武士、何れも泰時に心服した。

♡季庚子が、盜を憂へて、孔子に問ふと、孔子は、「苟くも子の不欲ならば、これを賞すと雖も窃ます。」と答へた。無慾を以て臨めば、下は、必らず心服して、風儀も、自然によくなり、人情も、自然に厚くなり、自然に謙遜し、自然に推

讓して、所謂る、合せずして、五倫、五常が行はれる。啻に窃 窃まない位の小問題ではない。下が惡いのは、上が惡いのである。最も上の强慾が惡いのである。奉公人の懶惰、不忠實、不從順、費ひ込みを嘆ずる主人は、よくよく心すべきである。

元就と儒臣某

＝思ふ事打ちつけにいふ人ならば
心の底に誠あるべし＝

毛利元就は、英明の主であつた。或る時、儒臣の某が、

『領内の民共は、君を甚はだ德として、湯武の世も及ぶまいと、